263.2
628

0049369000

0049369-000

263. 2-628

国民科国語綴方教育問答

緒方明吉・著

晃文社

昭和17

AHJ

奈良女子高等師範學校訓導
緒方明吉著

緒方教育問答

晃文社發兌

昭和十八年
奈良女子高等師範學校圖書之印

263
628

序

この書は、國民科國語綴方指導に關する問題を集めて、わかり易く說いたものであります。

こゝに集めました百餘の問題は、私が現在まで地方に出ました時や、私の學校に參觀された人から質問を受けたもの、その他、をり〳〵の機會に於いて、よく問題としてとり上げられたものから選びました。

私はこれ等の問題を選んで組織づけ、體系づけてお答へ致しました。で、この書をお讀み下されば、國民科國語綴方指導の精神や、その具體的要領について、おわかり下さること〻信じます。

由來、綴方といふ科目は主義や主張の多い教科でした。主義や主張の多かつたといふことは、一面から考へると、この科目が華々しく活動してゐたことにもなりますが、反面、そのために、迷つたり、苦しんだりして、適當なところで思ひ諦めて、實踐の意欲さへ持

たれなかつたやうな指導者もあられたのではないかと思ひます。國民科國語綴方教育は決して一部の「綴方教師」とか言はれる教師のためのものではありません。尚又、ある一部分の綴方優秀兒童のためにするものでもありません。

私はこの書に、理論よりも實際問題を多くとりあげ、偏せず、かたよらず、誰にも指導することの出來る國民科國語綴方指導の道を說いた心算であります。私はいつもこのことを考へて凡ての問題にお答へしました。研究の不足、思索の淺薄等で不十分のお答もあるかと思ひますが、それ等につきましては、諸賢の御教示を得て、更に研究の歩を進める所存でございます。

幸にこの書が、國民科國語綴方指導をなされる諸兄姉に對しまして幾分でも御參考になり、國民學校の綴方指導がもつと明かるく、もつと確に、もつと着實に推進される一助ともなりますれば、これに越した欣びはございません。

昭和十七年九月二十一日　　兒童の夏休日記を讀み終りたる日

著者しるす

國民科國語

綴方教育問答

目次

第一章　本質及び目的に關する問題……一

第一問　國民科國語綴方は從來の綴方とその本質的にどう違ひますか……一

第二問　國民科國語教育上に於ける綴方教育の使命を說明して下さい……三

第三問　表現するといふことの發生的な過程をお知らせ下さい……五

第四問　綴方は「兒童ノ生活ヲ中心トスル」といふことはどんなことですか……九

第五問　綴方に於ける生活指導の意義を說明して下さい……一一

第六問　綴方に於ける表現指導の要領について述べて下さい……一四

第七問　綴ることによる生活創造とはどんなことですか……一七

第八問　綴ることによる生活意欲を持たせるといふことはどんなことですか……二〇

第九問　綴方と讀方との關係を說明して下さい……二三

第十問　綴方と話し方との關係を說明して下さい……二三

第十一問　綴方と書方との關係を說明して下さい……二六

第十二問　理數科理科と綴方との關係を說明して下さい……二八
第十三問　綴方と他教科との關係を說明して下さい……二九
第十四問　文藝思潮と綴方とはどんな關係がありますか……三〇
第十五問　擬古主義文學と兒童文との關係を說明して下さい……三一
第十六問　浪漫主義文學と兒童文の關係を說明して下さい……三二
第十七問　自然主義文學と兒童文の關係を說明して下さい……三三
第十八問　自然主義的な物の見方とはどんなことでせうか……三四
第十九問　從來までの綴方には、どんな主張的なものがありましたか……三六
第二十問　主義や主張に對して私達はどんな態度をもつてゐたらよいでせうか……三八
第二十一問　兒童文には、方言や訛語は絕對に使はせてはなりませんか……三九

第二章　兒童及び兒童文の見方に關する問題……四二

第二十二問　兒童觀は教育上にどんな位置を占めますか……四三
第二十三問　從來の兒童觀にはどんなものがありましたか……四四
第二十四問　國民學校に於ける兒童觀について說明して下さい……四五

第二十五問　よい兒童文とはどんなものでせうか……四八
第二十六問　わるい文とはどんなのでせうか……五一
第二十七問　兒童文の見方には一定のきまりがありますか……五四

第三章　文の題材とその指導法に關する問題……五七

第二十八問　文の題材はどんな範圍から取材させたらよいでせうか……五七
第二十九問　毎月に於ける文の題材となるものを具體的に擧げて下さい……五九
第三十問　時局的な綴方とはどんなものでせうか……七五
第三十一問　どうすれば時局的な綴方が生まれるのでせうか……七七
第三十二問　文の樣式にはどんな種類がありますか……八〇
第三十三問　科學的な綴方とはどんなものですか……八二
第三十四問　繼續觀察の綴方の材料はどんなものがよいのですか……八三
第三十五問　繼續觀察の綴方の材料を學年的にあげて下さい……八五
第三十六問　日記の指導は何年から始めたらよいでせうか……八八
第三十七問　日記をつけさせることは、教育上どんな價値がありますか……八九

第三十八問　日記を毎日書かせるにはどうしたらよいでせうか……九二
第三十九問　日記にほんたうの事を書かせるには、どうすればよいのでせうか……九四
第四十問　日記の指導は學年的にどう發展して指導すればよいでせうか……九六
第四十一問　手紙文の指導は何年から始めたらよいのでせうか……一〇〇
第四十二問　候文は書かせる必要がありますか……一〇一
第四十三問　手紙文を指導する上には、どんな注意が要りますか……一〇三
第四十四問　慰問文はどんなのがよいのでせうか……一〇五
第四十五問　慰問文指導上の留意點をお知らせ下さい……一〇七
第四十六問　實用文とはどんなものですか……一一一
第四十七問　生活文とはどんなものですか……一一一
第四十八問　童詩の指導はどんな價値をもつものでせうか……一一三
第四十九問　童詩の入門指導はどうすればよいでせうか……一一五
第五十問　童詩指導の學年的發展段階をお知らせ下さい……一一八
第五十一問　短歌や俳句の指導はどの程度でよいのでせうか……一二三

第四章　學年的指導段階に關する問題……一二五

第五十二問　綴方の初歩的な指導はどうすればよいのでせうか……一二五
第五十三問　言語發表の指導にはどんな心構が必要でせうか……一二七
第五十四問　繪による發表指導の價値を御教示下さい……一二八
第五十五問　繪日記の書かせ方はどうすればよいのですか……一二九
第五十六問　紙芝居指導上の注意をお知らせ下さい……一三一
第五十七問　綴方の教授細目は必要でせうか……一三四
第五十八問　綴方の教授細目を作る上の注意をお聞かせ下さい……一三五
第五十九問　教授細目の生かし方についてお知らせ下さい……一三九
第六十問　低學年の兒童文の指標はどの程度でよいでせうか……一四〇
第六十一問　中學年の兒童文はどの程度に伸ばすべきでせうか……一四一
第六十二問　高學年の兒童文はどうあればよいのでせうか……一四二
第六十三問　兒童の生活とその表現の學年的發達傾向を御教示下さい……一四四
第六十四問　綴方の學年的指導の大綱を表示して下さい……一五三

第五章　綴る以前の指導に關する問題……一六〇

第六十五問　綴る以前の指導とはどんなことですか……一六〇
第六十六問　綴る以前にはどんな指導が必要ですか……一六一
第六十七問　綴方を好きにさせるにはどうすればよいのでせうか……一六四
第六十八問　文材帳の指導について御教示下さい……一六六
第六十九問　綴方生活暦はどんな意味を持つものですか……一六七
第七十問　綴りたい心はすぐに文として表現することが出來ますか……一六八
第七十一問　物の見方の指導とはどんなことですか……一六九
第七十二問　構想の指導はどの程度にすべきでせうか……一七〇
第七十三問　綴る要項をあげて綴らせる必要がありますか……一七一
第七十四問　記述させるまでの話し合ひはどの程度にすべきでせうか……一七二
第七十五問　課題作と自由作とはどんな長短を持つてゐますか……一七三

第六章　記述から完成までの問題……一七六

第七十六問　記述の時間に於ける教師の態度はどうあるべきでせうか……一七六
第七十七問　句點、讀點、改行の指導はどの程度に必要でせうか……一七七
第七十八問　句讀點の大切なことをわからせるよい方法はないものでせうか……一七八
第七十九問　字の下手な兒童の綴方はどうしたらよいでせうか……一八〇
第八十問　文を推敲する態度はどうしてつけるのですか……一八一
第八十一問　概念的な文を書く子供はどうして指導したらよいのでせうか……一八三
第八十二問　文を多く作らせるのと少く作らせることの可否を述べて下さい……一八五
第八十三問　批正することの價値を說明して下さい……一八六
第八十四問　文を批正させる要領をお知らせ下さい……一八七
第八十五問　他人の文をよく聞く態度をつけるのによい方法はありませんか……一八九
第八十六問　文を鑑賞させる場合の要領をお知らせ下さい……一九一
第八十七問　文を鑑賞させる場合にはどんな注意が必要ですか……一九三
第八十八問　讀方に於ける鑑賞と綴方に於ける鑑賞とはどう違ひますか……一九四
第八十九問　批評させる態度はどうして育てるのですか……一九五
第九十問　文話及び文話する場合の注意をお知らせ下さい……一九七
第九十一問　參考文はどんな條件で選んだらよいのでせうか……一九九

第九十二問　生活の見方、考へ方の誤つた文に接した時はどうしたらよいのですか　二〇三
第九十三問　綴方の成績はどんな觀點から評價すべきでせうか……　二〇三
第九十四問　文の評語はどう書けばよいのですか……　二〇五
第九十五問　綴方の一般的な指導過程を御教示下さい……　二〇六
第七章　自餘の諸問題……　二〇九
第九十六問　綴方に於ける劣等兒はどうすればよいのでせうか……　二〇九
第九十七問　綴方に於ける家庭作業はどの程度にすべきでせうか……　二一二
第九十八問　綴方教室の施設經營に就いて御教示下さい……　二一三
第九十九問　文集の經營法と、その活用法をお聞かせ下さい……　二一六
第百問　綴方を指導する教師に文藝的な教養は必要でせうか……　二一九
第百一問　少國民文化とはどんなことですか……　二二一
第百二問　綴方指導上教師の心得るべき最も大切なことはどんなことですか……　二二四
第百三問　一校に於ける綴方主任はどんなことをすればよいのですか……　二二六
第百四問　綴方教師といふのはどんな教師をさすのですか……　二二八
第百五問　綴方の指導案はどう書けばよいのですか……　二二九

國民科
國語

綴方教育問答

第一章　本質及び目的に關する問題

第一問　國民科國語綴方は從來の綴方と本質的にどう違ひますか

綴方は兒童の生活を中心として、これを國語によつて表現する方法を修練させるものですから、その仕事の上からは何も變つたものではないのです。

しかし、國民科國語綴方は、皇民を錬成する一部面としての國民科の精神によつて統合され更にその國語科としての任務をもつて、國語表現の能を得させようとするものであります。この點從來の綴方と、國民科國語としての綴方には本質的に相當な距りがあることを認めねばなりません。

即ち、從來の綴方は――單に綴方のみならず他の教科に於いてもさうですが――特に皇國民を錬成するために綴方を指導するといふのでなしに、人間として一通りの教養をつけるために國語表現の能力を得るといふ樣な考へのもとに指導されて來たのです。もつと言へば、人間として一通りの教養をつけるためには綴方といふ教科も必要であるといふ樣な考へのもとにこの教科が位置づけられて來たのですが、國民科綴方は、國民學校令第一條である

國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲ爲スヲ以テ目的トス

といふ國民學校の根本精神から割り出され、その國民としての基礎的錬成をなすためには御承知のやうに、國民科、理數科、體錬科、藝能科、實業科のやうに五つの教科が組織され、その國民科に於ける

國民科ハ我ガ國ノ道德、言語、歷史、國土國勢等ニ付テ習得セシメ特ニ國體ノ精華ヲ明ニシテ國民精神ヲ涵養シ皇國ノ使命ヲ自覺セシムルヲ以テ要旨トス

といふ要旨に統合され、しかも、更に、國民科國語に於ける

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理念力ト發表力トヲ養ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス

といふ國民科國語の要旨に副ふて、國民科國語の四分節である讀方、綴方、書方、話し方の四科目の一つとして

綴方ニ於テハ兒童ノ生活ヲ中心トシテ事物現象ノ見方考ヘ方ニ付適正ナル指導ヲ爲シ平明ニ表現スル能ヲ得シムルト共ニ創造力ヲ養フベシ

の如く、この教科の教科性格が體系づけられ、その指導の目的が意義づけられてゐるのです。

これを要するに國民科綴方も、從來の綴方も、綴るといふ本質的な仕事の上からは變つたものではありませんが、その教科性格から考へますと、以上述べて來ました樣に大目標を見通した一つの教科の指導面として性格づけられてゐるのです。ですから、その指導方向になりましても當然いろ〳〵の點から見改めて行かなければなりません。

第二問　國民科國語教育上に於ける綴方教育の使命を說明して下さい

國民科國語教育では、日常の國語を習得せしめて、國語の理會力と發表力を養ひ、國語のも

つ思考感動を通じて國民精神を涵養することがその目的となつてゐます。しかして國民科國語綴方は主として國語の發表力を修練するための教科とみてもよいのであります。即ち、國語讀方では、國語の理會力を養ひ、それにつれて發表力を修練するのですが、國語綴方では、國語の發表力を修練することが主となつて理會力が副となると思つてもよいかと思ひます。勿論これ等は嚴密に二者それ〴〵に別けて考へることの出來るものでなく、讀方の指導も、理會力を修練し、更に又發表力を錬成するものであり、綴り方に於いては、國語の理會力を得させることが發表する力を持つやうになることは言ふまでもないことでありませう。

偖、特に國民科國語教育では從來の國語の指導面としての讀方、綴方、書方の外に、話方といふ科目が設けられてゐます。話方といふ科目がなぜ特設されたかといふことに就きましてはもう大方の人々がよく御承知のことゝ存じますが、これを要說すれば從來の國語指導が文章の內容や、その內容の解釋といふことに重點が置かれ、日常の話言葉即ち音聲言語の指導が手ぬかりになつて、國語の醇正化といふことが容易でなく、いつまでたつても方言は方言、訛語は訛語のまゝに無指導の形であつたといふことが出來るやうです。

ところで、國民科綴方教育は要旨にもあります樣に、兒童の生活に基調して日常のことばを文字として表現させることに第一義的な指導の方法がありますので、この指導をなすことによつて、國語の醇正化といふことがより價値的に行はれるし、これを積極的に言へばこの綴方を指導することによつて、兒童のことば—それには方言もあり訛語もあるでせう—を導いて、より醇正なる國語を使用し得るやうに導いてやらなければならないのです。こゝに國民科國語綴方教育の一つの使命があります。

次に生活に基調してその行動や精神を國語によつて表現する能力を修練することが、國語綴方の使命でありますから、そこには當然、自分の行動や精神を、讀む人に、よくわかるやうに表現するといふことが要求されます。相手にわかりやすく表現するためには、表現する順序や言葉づかひに注意することは言ふまでもありませんが、特に正しい國語を使つて綴らなければならないのです。で、そのためには假名遣や文字にも注意しなければならないし、更に、自分の行動や感情を表現するのに最も適切なことばを選ばねばならないといふことも起り、そのえらんだことばを、どの樣に表現するかといふ國語表現上の力も修練されて行かねばなりません。

尙、綴ることによつて、國語のはたらきや、國語の有り難さ、國語の美しさ、國語の味はひ等についても漸次に意識的にさせて、國語を尊重し、國語を愛護する態度を、國民科國語、讀方、話し方等の指導と相俟つて理會させることも、その使命の一つとして意義づけることが出來るでせう。

第三問　表現するといふことの發生的な過程をお知らせ下さい

表現するといふことをその表れ方の本質から觀ますと、先づ身體的な表出と、精神的心理的な表出の二面があると考へることが出來ませう。身體的表出といふのは、身ぶりや、手ぶり等の樣に主として身體を動かしてそれ〴〵の思想や感情を訴へようとするものであり、聾啞者が自分の言はふとすることを巧妙に手ぶりや、身ぶりによつて相手にわからせるのがこれであります。聾啞者のみならず、幼兒が空腹を知らせるために母をつれて菓子箱の上つてゐる茶棚を指さしたりする癖もこれであります。次に心理的、精神的表出と言ひますと、喜怒哀樂や、快不快の感情をその表情や動作に表現することを指します。何か昂奮した場合に眉毛を逆上させ紅潮した頰をする等の如きこの表出作用とみることが出來るでせう。

偖、これ等の表出作用を如何に表現するかといふことを考へると、

音聲による表現
繪畫による表現
文章による表現

の如く大別することが出來るでせう。

これを兒童の心理發達の過程から、更にその精神發達の過程から發生的に眺めますと、先づ音聲による表現といふことが第一の段階として位置づけられるのです。幼兒は生まれて間もなく空腹を訴へて泣きます。母親はその泣き聲によつて空腹であるために泣くか、それともどこか體の具合が惡いか、といふやうなことを知ります。やゝ進んで二、三歲になりますと「ワンワン」とか「モーモー」と言ふことによつて、犬や牛を指示し、具體的にみつめてゐるそれ等の動物の行動を對者に訴へます。これと前後して彼等は實際に見たものや、繪本等によつて知つたものについて、鉛筆や、クレヨン等でその形を描くことを喜びます。三、四歲の子供が、

鉛筆を持つて白紙の上に描き出されて行く黒い線を半ば好奇的に眺めつゝ、何か一寸意味づけも出來ないやうな繪を描いて嬉しがるのは誰も觀られた經驗があられると思ひます。かうして彼等はその生活にもつとも手近かいもの、關係の深いもの、その形の簡單なものを繪として表現するのです。彼等はにはとり見たいな鳥を描いて、スゞメになぞらへたり、犬見たいな動物を描いて自分の家に居る猫になぞらへたりするのです。斯くしてその繪について說明することを要求すると繪の話をしたり、繪から發展してその繪の前後關係等を生活と結んで話すのです。

かうして行くうちに、學校に上るやうになつて、文字を收得すると、自分の名前やその生活を文字によつて表現することの喜びを味ひ、ところかまはず大きな文字で自分の名前を書きつけたり、學習ノートにその生活を少しづゝ文字として表現することが出來るやうになるのです。勿論この間にも、自分の言ひまはしの足らないところや、文章として表現することの困難なところは繪によつて表現するのです。

かういふやうに考へて行くと、兒童に於けるその發生的な表現の過程は、口頭表現——繪畫表現——文字表現、といふ樣な大體の段階があるといふことが出來るでせう。

第四問　綴方は「兒童ノ生活ヲ中心トスル」といふことはどんなことですか

「綴方ハ兒童ノ生活ヲ中心トシテ……」といふことは、誰もわかつたことのやうで、よく考へて行くとわからないやうになつてしまひます。成程子供に書かせる綴方ですから大人の生活を綴らせるのでなく、兒童の文は子供の生活が表現されてゐなければなりません。それは、綴方といふ仕事はつくるものでなくて、その生活の中から、生まれるものであるといふ教科性から考へても「兒童ノ生活ヲ中心トスル」ものであることは言ふまでもありませんが、肝心な「兒童ノ生活」の內容がもつとはつきりわかつてゐない限り、この問題は解決しないものと思はれます。

ところで、兒童の生活とは一體どんなものでせうか。

兒童の生活は、大人の生活と全く別な系統のものではありません。兒童は兒童として大人と變つた生活をしてゐるのですが、大人の生活と全然別ものではなくて、兒童の生活を發展し、向上させて行くところに大人の生活も形づくられて行くものであります。

國民學校に於ける兒童觀では、一本の成長しつゝある木に例へて、小さい木は木としてまとまりながらも大きな木に成長發展するものであるといふやうに觀てありましたが、とに角、兒童の生活も亦それは進んで高度の國民生活に發展しなければならないものであります。

さて、兒童は一體どんな生活をしてゐるのでせうか。

生活は特殊的、具體的なものであつて、これを定義したり、抽象したりすることは甚だ困難なことであります。

そこで、私は、先づ兒童はどんな性格の生活をしてゐるか、言ひかへると、兒童の生活はどのやうな性格をもつものであるかといふことを述べてみます。

兒童の生活をその場所的な環境から考へますと、兒童は鄉土の自然的環境の中に生活し、又特殊的具體的には、それ〴〵の家の子供として生活し、自分の通つてゐる學校の生徒として生活し、村の子供、町の子供として生活してゐるわけです。

しかして、これ等の中にあつて、兒童は、傳統的な村の行事の中に生活し、その屬する學校の一員として、更には學級の一員として生活してゐるわけであります。

しかも、その心理的には、泣いたり、笑つたり、悲しんだり、喜んだりして生活してゐますし、又、意志的には、働いたり、調べたりして生活してゐるわけです。

かくて、その環境に即し、行動的現實に從つて兒童は兒童としての生活をしてゐるのでありまして、その生活具體の中には、勿論、教師がこれを導かねばならない性格のものもあり、又その生活を見改めさせ、これを矯正して行かなければならぬものもあります。そこに教育するといふことの意義があるわけであります。

とに角、兒童の生活を中心として、といふことは、發達の過程中にある兒童、將來皇國民にならうとする兒童の生活といふことでありまして、大人の縮圖としての兒童の生活ではなく、又、あるがまゝに、たゞひき伸すことのみを考へるやうな、過去の兒童中心的な自由主義的な兒童の生活でないことを充分考へなければならないのであります。

第五問　綴り方に於ける生活指導の意義を説明して下さい

綴方は兒童の生活の中から生まれるものです。國語讀方の指導も兒童の生活をその出發點と

するものですが、讀み方の教材は年級の進むにつれて、より高い國民文化的教材等もとられ、文化指導教材といふ立場から選ばれるのであります。しかし國語綴方の對象は常に兒童の日常具體の生活です。綴方は「兒童ノ生活ヲ中心トシテ」といふのもこの邊の事情を言つたことです。ところでこゝに言ふ「生活指導」といふことは從來からとに角、綴方教育で問題になつたことです。今國語「よみかた」の教師用のことばをかりると、

「『讀方』の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが、年級の進むに隨つて漸く高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると『綴方』は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、『讀方』よりも寧ろ『綴方』に於いていひ得ることである。そこで『綴方』に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に即して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために、綴方指導は或程度の發達を遂げながらも、不幸にして不健全な思想を釀成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から、物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捕はれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。『眞』を描く前に先づ如何なるものを書くべきかを指導する必要があり、「道」に照らして心にうつり行く情意を表さしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は『綴方』に於いても例外なく要求されるのである。」

非常にわかり易く說明されてありますので、改めて述べるまでもないと思ひますが——

綴方に言ふ生活指導は、それが皇民錬成のための國民科國語綴方指導である限り、當然、教育の立場からする倫理性は要求されるものでありますし、又、生活の事物現象に對する見方、考へ方も、皇國の道に照して指導されなければならぬことは言ふまでもありません。しかし、私はこゝで特に念のために申し述べますと、綴方に於ける生活指導は、このやうにたしかな教育體系の上に樹立されながら、もつと直接的には國語を平明に表現し得る能力を得させるといふことが、その生活指導の重要な一面であるといふことを强調したいのであります。

自分で思つたり、行つたり、感じたりしたことを、言語や、文章で發表するのは決して容易なことではありません。特に文章で表現するのにはより以上の困難が伴ひます。そこには表現する素材的なものが考へられなければなりませんし、その構想はもとより、言葉づかひから假

名遣に到るまで實になみ大抵の苦勞ではありません。これを指導し、これを兒童の生活的なものとすることが、國語綴方に於ける重要な生活指導であると考へてもよいわけであります。

要約しますと、道に照して醇正な國語を文字によつて表現する能を修練することが綴方に於ける生活指導の任務でもあります。

第六問　綴方に於ける表現指導の要領について述べて下さい

綴方といふ科目は、國語によつてその思想・感情、更にはその生活行動を表現する方法を修得させるための教科であります。しかしその表現する心は常に生活に基調を置くものであらなければならないのです。もつとわかり易く言へば、兒童それ〴〵の生活に從つてその行動や、行動に從つて起る多樣なる感情を素直に、表現させなければなりません。自分の感情を最も素直に、如實に表現しようとすれば、所謂表現する方法として、その構想とか記述要領等の修練も必要であります。野球の投手がボールを投げる。この場合打者に對してカーブを出さうとすれば、ボールの握り方も、投げ方も必ず變つて來なければなりません。これと同じやうに、自分の心持を最も表直に、自分の心持に忠實に表現しようとすれば自らそこに構想の問題や、綴る方法の問題が考へ合はせられなければならないのです。

例へば、同じやうに花の美しいことを言ふにしても次のやうに多くの語り方があるでせう。

この花は美しい。

この花は大變美しい。

この花は今まで見たことのない程美しい。

この花はとても美しい。

あゝ美しい花である。

この花はきたなくはない。

あゝなんと美しい花であらう。

あゝなんと、まあ、美しい花であることよ。

このやうに言擧げをして行くと、際限がないやうですが、兎に角、いろ〳〵の言ひ表し方があるといふことが言へるでせう。まして、ある事柄を綴らうとする時、その事柄に即するやう

に、又自分の心持を相手にわかるやうに表現すること、更には綴らうとする事柄の氣分までその文の中に織り込まふといふことになると、仲々生やさしい仕事ではありません。自分の心を最もうまく穿つたことばを見つけ出すために古來、文をつくる人がどの位苦勞したかといふことや、一語を見出して文全體が生きて來たといふこと等は數へ上げられない程多いことです。

しかし、國民學校に於ける國民科國語綴方では、先づもつて兒童の生活の中からそのことばを表現させるやうにつとめて、いたづらに、ことばのみをあれこれとおきかへたり、並べかへたりするやうな制作態度としないことが大切です。過去の型式主義的な綴方指導で行はれたやうに、自分の思想や、感情がどうあらうと、「又快ならずや」とか、天氣がよかつても惡かつても「天氣晴朗にして……」等と、その生活と關係のないことを、文の表現のみで何とか作り上げるといふやうなことは絶對に避けねばならないのです。一歩をゆづつて、現在の國民學校ではこれ程の文は作らせてゐないにしても、やはり何か綴方といふ教科を單にその言葉をかざり言葉をおきかへる仕事のやうに解して、批正指導、鑑賞指導等の時間に教師は、文を制作した兒童を前において、その生活も、その行動も知らないで「こゝのことばは變だから、かう直しなさい」「こゝはこの方がよい」等と修作してみせると、子供の方では、「綴方といふ仕事は自分で思はないことでも思つたやうに書くものだ」「自分でしなかつたことでもしたやうに綴るものだ」といふやうに考へてしまつて、ことばのみに捉はれた綴方、表現技巧のみを考へる制作態度に向つてしまふのです。さうして概念的な文章、ことばの羅列に終つた文章をつくるやうになつてしまふのです。これでは先づ「綴方ハソノ生活ヲ中心トシテ」といふ生活基調の根本態度が疑はれるやうになるのみならず、その文章も眞實味のある生きた文章でなくなつてしまふのです。

これを要するに國民科綴方の表現指導は、先づことばに捉はれることなく、自分の心に即したことばを十分驅使させ、自分の身についた言葉で文をつくるやうに指導し、稍進んでは、自分の心を、自分の行動を最も素直に忠實に表現し得るやうに進展させなければならないのであります。

第七問　綴ることによる生活創造とはどんなことですか

先づ「創造」といふことの一般的な意義を述べますと、「はじめ造ること・造り出すこと・つくること」＝（言海）のやうに解してあります。

さて、國民學校教則要項には、その「讀方」の教材中に「讀方ハ兒童ノ生活ニ即スル言語ヨリ始メ日常ノ言語ヲ基礎トスル國語文ニ進ミ更ニ平易ナル文語文ニ及ブベク兒童生活ノ表現ニ出發シテ國民生活ノ諸相ニ展開セシムルト共ニ國語ノ規準トナリ創造力ヲ養フニ足ルモノタルベシ、高等科ニ於テハ著名ナル作品ヲ加フベシ」とあり、この場合に於ける創造力を「國民學校の教則には「創造」といふ語で「創造」も「創作」も總括してある。こゝでは國語表現に即しての「創作力」と解すべきであるが、然しそれは狹義の文學の創作を意味するのではなく、理知を基礎とする表現にも通じて考ふべきである。これは綴方の項に於いても同樣である。」

と解說してあります。これによれば「創造」といふことは一先づ「創作力」と解されるのですが、それは單に文學の創作のみを指すのでなくて、理智を基礎とする表現にも通じて考へられねばならぬといふことがわかります。

偖、綴ることによる生活の創造といふことはどんなことでありませうか、「よみかた」（一）教師用書三〇頁には、

「『綴方』は、國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の營みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いて外になく、しかもその最も積極的なのが『綴方』である。即ち兒童の見方、考へ方の指導は、常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ、創造力に培ふことが大切なのである。」

と述べてあります。

これ等のことから考へて行きますと、綴ることによる生活創造といふことは、その生活に即し、生活の事物、現象に對する見方・考へ方を知り、より價値ある、より豊かな觀照能力と、これを表現する能力を得させて、新しい明日の日の生活を一歩々々と築き上げて行くことであると言へるでせう。

文を綴るためには、その生活を反省し、これを忠實に文章として表して行かねばなりませ

ん。しかもその綴るといふ仕事の中には、當然生活事象の見方、考へ方といふことが先行され、これを表現して行くことによつて、新らしい明日の自己を建設して行くのです。一體私達の思想とか感情といふものは絶えまなく流動してゐるものでありますが、これに一つの體を與へるものは、この思想や感情を言語化してみたり、文字化して見たりすることです。この言語化、文字化によつて、私たちは、よりたしかなる自分の思想を見、より具體的な自分の感情をとらへることが出來るものです。

要言すれば綴ることによる生活創造とは、生活を文章として表現することによつて、より新しい自己をきづき上げて行くといふやうに考へたらよいと思ひます。

第八問　綴ることによつて生活意欲を持たせるといふことはどんなことですか

先づ、生活意欲といふことばの意義を考へてもらひませう。生活意欲といふのは、よりよき明日の生活を建設して行かうといふ欲求です。今日の生活に甘じないで、もつと堅實な、もつと力に滿ちた、もつと價値ある、もつと眞劍な明日の生活を希求する心です。ところでその心がどうして綴ることによつて錬成されて行くのでせうか。

子供が文を綴るためには、どうしてもその文に表現しようとする生活を反省しなければなりません。さうして、その反省は單にふりかへつてみるのみでなく、更によりよく生きようといふ意欲を孕むものであります。かうして綴る間に明日の生活に希望をもち、力強き歩みを續けようとする欲求が生まれるのです。

尚、次に、これは前の生活創造といふことにも關係することでありますが「人はことばを使ひ、ことばを創造しながら、そのことばによつてつくられて行く」ものであります。國民學校に於ける國語教育は實にかうした國語機能觀によつて解譯されなければなりません。「ことばによつてつくられる」文を綴ることによつて、生活を表現して行くことによつて、明日の生活に意欲を持つやうになるのです。もつと眞劍に生きようと思ふ心が育てられて行くのです。かうして眞劍に生きて行く姿が文によつて表現され、これを綴り行く眞劍な態度によつて今日の日の生き甲斐を感じ、明日の日に意欲を持つて打ち向ふことが出來る心を創り上げて行くのです。

具體的に例をとつて言へば、例へば秋のたんぼの取入れに子供ながらにも自分で出來るだけの仕事を一生懸命に加勢したとします。さうしてそのことを文に表現しようとします。するとその事を表現して行くそのことの上に、それ自身の姿の上に、自身をみつめ、自分の力をたのみ、明日から自分はもつと頑張らう、自分もあれだけの仕事の手傳が出來たのだといふ自覺を喚び起します。かうして明日の日の自分を意欲的に建設して行くことが出來るといふのです。さうしてこのことが綴ることによつて生活を創造して行くといふのでもあります。

第九問　綴方と讀方との關係を說明して下さい

綴方と讀方との關係、これは物の裏と表の樣な密接な關係があるのです。綴方の立場から讀方をみれば、讀方は綴方の裏打ちをする教科であるといはれませうし、讀方の方から言へば、綴方は讀方の裏打ちをする教科であるといふことが出來ます。とに角、讀方では文字によつて表現された文章を讀解することにその主な仕事があつて、讀解力を練ることがその指導の根本となるのですが、綴方では、その讀解力によつて理會した心を表現させる能力をつくり上げることがその主な仕事となるのです。もつと言へば文章によつて展開された焦點の心を讀むことが讀方であるし、己れの內に燃ゆる心を展開する（表現する）ことの仕事が綴方の任務であります。

「よみかた」（一）の教師用書二八頁にも

「『綴方』指導は『讀方』指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を錬成する國語指導の一分節であつて、『讀方』と密接な關係をもつものである。」

と述べられてあります。實に讀方に於いて養はれたる文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を錬成するのが綴方であり、又、國語讀方に於いて養はれたる文鑑賞の心を自分のことばとして表現する能力を修練するのが綴方であります。

第十問　綴方と話方との關係を說明して下さい

「在來『話方』は、國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ために我が國語指導は、やゝもすると文字言語に限られがちであり、こゝに國語指導の弱點があつたと考へ

られる。國民科國語に於いて新たに『話方』が拾ひ上げられ、表面におし出されたのは大いに注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したのである。隨つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地盤たる音聲言語としての國語が正しく豊かに培はれることが大切であつて、そこに『話方』の重要性がある。

……「よみかた教師用書、一二三頁」

實に我が國に於ける從前の國語指導と言へば文字言語の指導に限られてゐた形であつたのです。國語教室で、方言や、訛語が何等の指導もなく横行したのでもありました。國民科國語教育で「話方」といふ科目が國語指導の一分節としてとり上げられたことの意義を、私達は再三熟考して音聲言語の指導にぬかりがあつてはなりません。ところでこれ程重要である音聲言語指導面としての話方と、國民科綴方の指導とは如何なる關係を持つてゐるでありませうか。

先づ話方も綴方も、國語による表現力を修練する科目であることは言ふまでもありません。即ち話方は音聲言語としての發表力修練の科目であり、綴方は文字言語としての發表力の修練科目であります。ところで國語話方の指導は特に話方と時間を特設しないのを立前とするのでありまして、これは讀方綴方の指導と關聯して指導されるやう努めなければなりません。

そこで綴方の指導は學年的に見て、文字を知らない初等低學年ではいかなる形として運營されて行くかといふことを述べますと、これは所謂、「口頭綴方」として、兒童の日常生活の中の話言葉から出發するのであります。そこで所謂文字言語としての綴方發表以前の問題として、どうしてもこの「話方」の指導をやらなければなりません。かうして文字を少しづゝ覺えて來るに隨つてその話言葉は文章として記述されて行くのです。こゝに一つの關聯があるのであります。

尙、國語綴方はそれが兒童の生活から生まれるといふことによつて、日常の國語の醇正を圖るといふ意味に於いては國語讀方以上の廣さとその重要さを認めねばなりません。さうして國語話方の指導も亦綴方の指導と相俟つて日常國語の醇正化を圖る科目に外ならないのであります。即ちこれ等を適正に導くことが醇正なる國語を使用させることであり、延いて我が國語の健全なる發達をなさしめる所以となるわけであります。

第十一問　綴方と書方との關係を説明して下さい

先づ國民科國語に於ける「書方」の意義を認識しなければなりません。このことについては「よみかた」教師用書に次のやうに述べてあります。

「書くこともまた『讀方』の一操作であると考へられる。即ち文字の劃や筆順を正しく指導し正確に書寫せしめることに始まつて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、こゝに實際指導に於ける「讀方」と「書方」の相即がある。この場合注意すべきことは、書くことを徒に器械的ならしめ、言語の取扱ひを形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語・文章の意義とか、構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。隨つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍内で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて思考・感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。」

この文によつて明らかなるやうに「書方」は單に文字の練習として行はれるのでなくて、實に書くことによつて文の讀方を深めることであります。私達の拙き經驗から考へましても、ぼんやり腕をこまねいて考へるよりも、何か一枚の紙の上に文字を表して考へる方が、考へが落ちついて來て名案が浮ぶ様なことはよくあります。尚、むづかしくてわからないやうな文章もこれを書寫しながら讀み、讀みながら書寫して行くことによつてその文の心に觸れるやうなことは屢々感ずるところであります。小學校の頃「少年よ大志を抱け」と一生懸命に練習した習字の教材が、今私の心のどこかに殘つてゐて、それが時々頭をもたげるやうな心持さへすることがあります。

かう考へて行くと、「書方」は「讀方」に關聯して文の讀解力をたすけ、それは又綴方に於ける表現力を養ふことゝなるのであります。

次に書くことの形式として、そこには句點あり、讀點あり、鈎あり、二重鈎あり、等々種々様々な表現の形相をもつものですが、文を書寫することによつてそれ等表現上の約束を自らにして了得するといふことになるのであります。こゝにも書方と綴方との關聯があります。尚、

その他、文章を書くことによつて文字の收得や假名遣が理會されることは言ふまでもありません。

第十二問　理數科理科と綴方との關係を說明して下さい

理數科理科と綴方は、そのどちらも物の眞を探究しようとする態度に於いて非常に似通つたものがあります。卽ち、綴方で生活事象を正しく表現しようとすれば、當然これに對する觀方を適確なるものとしなければなりません。

特に、近時所謂、國民の科學的生活態度の涵養といふことが、より强く叫ばれてゐます時、科學的態度を建設させる前提としても、生活事象に對する觀方、考へ方を科學的に指導するといふことは大切なことであります。

かうして、日常の科學的生活態度を綴方に取入れ、これを表現させることによつて、物の眞を究める態度も錬成されて、理科と綴方が相互に關聯して進められて行くのであります。

題材の部面から見ますと、所謂「繼續的觀察日記」等が特に理科と綴方と關聯するものであります。（題材についての詳しいことは第三十四問、三十五問を御參照下さい。）

第十三問　綴方と他教科との關係を說明して下さい

綴方は兒童の生活とみつちりと手を結んだ教科です。その生活なくしては綴方の教科はないものとも考へられるものです。ところで兒童の生活を廣義に解釋しますと、行事生活もあり、鄕土的傳統的生活もあり、勿論遊びの生活もあり、仕事をする生活もあります。又別の見方からすれば學校生活もあり、家庭生活もあり、社會生活もあります。その中で學校生活の中には各教科學習といふことが含まれ、各教科の學習は綴方を綴る心を育て、又、反面綴る心は各教科の學習によつて育てられて行くのであります。例へば「自然の觀察」で、へちまの栽培をしてその水とりをした生活は、直ちにそれが綴方の文題となつて表現されても行きませうし、唱歌で「春の小川」の學習をしたら、春の小川への情感、自然によせる情操が醇化せられ、春の小川に對する感情が育てられて「小川遊び」として表現する文章の制作態度の豊かさと、深さを帶びて來るのです。特に國民學校初等低學年の教科は兒童の具體的な生活や、その季節の推

移に伴ふ生活の移り變りといふことに注意してその學習が進められるやう教材を配當してありますので、これ等を學習することによつて綴る心は育てられて行くのであります。

第十四問　文藝思潮と綴方とはどんな關係がありますか

子供の綴方は文學ではありません。しかし、それが兒童の生活に關聯して生まれるものであり、又兒童の生活は國家人の生活、國民生活の一部面でありますので、その生活には當然、時代的な生活精神とでも言ふべきものが流れてゐるのであります。例へば現代が超非常時としての戰時下であれば、その戰時下らしい生活精神が燃え立つてゐるのであります。

生活精神といふのは別言すれば人間として生きて行く思想であり、皇國民として生きぬかうとする國民的情熱であります。人は思想を離れて生活することは出來ません。さうして人間の生活を離れて文學はありません。文學は生活に基調する思想によつて表現され制作されて行くものであります。かういふ樣に考へて行きますと、實に一國に於けるある時代の中心思想はその國に於けるその時代の文學を通じて窺ふことが出來るといはれ得ると思ふのです。

今まで屢々述べて來ました樣に、兒童の綴方も亦時代の思潮と時代に生活する兒童の思想感情を端的に表現します。隨つて、綴方と、文藝思潮には切つても切れない關係があるのです。例へて言へば親と子のそれの如く、血族關係にあるとも言へませう。

第十五問　擬古主義文學と兒童文の關係を說明して下さい

擬古主義は古典主義とも言はれます。この主義の尙んだところは內容よりも形式であり、生命の潑剌さといふよりも型にはまつた美しさであります。文學の如きもよく整つたもの、よく調和したものを制作することに、專念して外部の型を主として形式を模倣したものです。もつと言へば古い型に促はれて自分の感情よりも、その眞實なる叫びよりも何よりも形式を尊重して文を制作したものです。

この主義に立つ兒童文は我が國に於ける明治初期から、その中期までの文章制作態度として表れたのです。即ち、自分の生活がどうであらうと、天氣がよからうと惡からうと、自分の思想や感情がどの樣に動かうとも、綴方は所謂作文であるといふので、例へば登山の記の文であ

れば「一瓢を携へて杖を裏山に曳く」とか、「天氣清澄にして氣快なり」等と書出して、「後日の爲め燈下に之れが記を作る」等と結んだのです。文の表現は所謂漢文調で書かれたものです。さうしてこのやうな型をうまく使つて行けば作文の成績は滿點であつたわけです。かうして綴り方は自分の思想を表現する能を得させる等といふことはその當時夢にも考へられなかつたのです。

第十六問　浪漫主義文學と兒童文の關係を説明して下さい

例によつて浪漫主義とはどんな主張を標榜するものであるかといふことに就いて述べてみませう。前に述べました擬古主義の尙ぶるところは理知的であり、形式を重んじたのに對してこの浪漫主義は感情的であり、內容的であつたといふことが出來ませう。知識は普遍的であり、客觀的であるが感情はある土地に制約され、その環境に住む人各々によつて特殊化されて行きます。隨つて擬古主義は團體的であり浪漫主義は個人的であるとも言はれませう。又所謂形式は客觀的にみとめられるものであり、內容は主觀的な所產であるとも考へられます。

かくてその生活に即して主觀的に且つは感情的に個人的に物を觀て來た態度は、一切のことに對してその感激と驚異とが語られ、個人的情熱がとり上げられて、稍もすれば現實を正視することが出來ないで理想が空想となるやうなことにもなつたのです。

さて、それが我が國の綴方教育に影響しては所謂「自由發表主義」の綴方として表れて來ました。そこで子供達は今までの型からぬけ出してしまつて、自分の感情に即して自由に發表することがゆるされ（むしろ賞揚せられ）て感情のまゝにその主觀を高潮し、空想をも敢て否定しないやうな文を制作するやうになつたのです。

第十七問　自然主義文學と兒童文の關係を説明して下さい

浪漫主義がともすると感情的であり、空想的であつたものに對して、自然主義はより現實的寫實的に物の眞相を見極めるといふやうな態度を標榜するものです。（これに關しては、次の項でもう少し具體的にのべませう）この精神に基調をおく綴方は、感情よりも理智で、主觀よりも客觀でといふことを念として、一切の生活事象に對して、冷靜に描寫し、克明に表現して行

く綴方として表れて來たのです。即ち、兒童には綴方では「ありのまゝ」に書きなさい、といふことを話し、僞らない文、告白の文等がもてはやされて來たのです。

例へば、兒童の家庭で、夫婦喧嘩があつたとしますと、それを殘すところなく克明に描寫させ表現させようともしたのです。これによつて兒童達は綴方は、自分の生活に即してものを言へばよいといふことは知りましたが、ともすると、その表現對象を間違へて所謂「自然主義的にものゝ眞理」を書くことのみにとらはれて、教育的に考へていかゞはしい綴方も生まれるやうになりました。

尙、つけ加へておきますが、自然主義の言ふ「眞」の實態は、決して客觀的な普遍的眞でなく、それはどこまでも個人を基調とする個人主義的な眞であるといふことです。例へばある一つの生活事象に對してこれを表現しようとする時、たとへ、それをそのまゝに描寫しようとしても、そこには必ず表現する個人の思想傾向か、生活傾向が表はれて來るといふのです。

第十八問　自然主義的な物の見方とはどんなことでせうか

先づ自然主義といふのはどんなことを基調とし、どんなことを標榜するものであるかといふことについて說明しませう。

自然主義の基調とするところはどこまでも現實的であり、物質的であります。知的、理性的であります。從つて又客觀的、科學的であります。この自然主義の主張によれば藝術の目的の如きも畢竟「眞」の一字に盡きてしまふのです。物に對して美しいと觀じ、善美なりと思ふのはこれは人の主觀的な感情的な見方であつて客觀的なものでない。「眞」は絕對である。如何なる人にも如何なる場合にも、一樣に實在する「眞理」こそ絕對であるといふのであります、かくて藝術ではその物の美醜や善惡の價値は敢て問ふ必要もなく、唯、物の事實に即して、ありのまゝにその「眞」を寫すところに根本の意義があるといふのであります。

例へばこゝに咲き出でたチユリツプの一鉢が置かれてあるとします。さてこの花に對していろ〳〵の見方があるでせう。

イ、如何にも美しい花だ、あの紅の輝き、したゝる樣なみどりの葉、和らかく伸びたうすみどりの莖、なんと美しいことでせう。

ロ、これはチュリップの花ですね、冬の中に肥料を與へたのでせう、割合に太つてゐるやうです。葉の色はみどり色で、莖の色はそれより少しうすみどりで三十糎程ありますね、花辨は赤です。

この二つの見方には相當に變つた觀點があることがみとめられるでせう。

その(イ)は感激的であり、主觀的であり、感情的であり、浪漫的であります。

その(ロ)は知的であり、科學的であり、描寫的であり、寫生的であります。

この樣な二つの考へ方をした場合、その後者を自然主義的な物の考へ方といふことが出來ませう。尙、言へばお隣の部屋から妙なる蓄音器の音が聞えて來るとします。これに對して、自然主義的に考へますと、それは美しい音ではない。音盤に高低をつけてあるために、それが鐵針にふれることによつて生ずる音の連續であると解しられさうです。

第十九問　從來までの綴方にはどんな主張的なものがありましたか

先づ從來までといふ言葉を國民學校體制以前といふやうに限定してお答へしませう。綴方には、教科書が作れないといふことや、これを指導する教師の性格によつて、更には土地を異にするにつれて、主義の多いことや、主張の多いことでは決して他の教科に劣らないものです。

今これ等を一つ〳〵あげつくすことは出來ないと思ふのですが、大體次のやうな綴方が標榜されたといふことは言へると思ひます。

鄕土的綴方（鄕土主義的なものを標榜する綴方）

村の綴方・土の綴方

科學的綴方（特に科學的なものを標榜する綴方）

調べる綴方・科學的綴方

實用的綴方（特に生活に實用といふことを標榜する綴方）

手紙文・式辭文・記錄文

文藝主義的綴方（特に文藝的價値を重視する綴方）

生命の綴方・觀照的の綴方

日本精神に立つ綴方（特に皇國精神の宣揚を標榜するもの）

皇道綴方・臣道實踐の綴方

自然主義文學的綴方（プロ文學傾向の綴方）

第二十問　主義や主張に對して私達はどんな態度をもつてゐたらよいでせうか

先づ第一に主義や主張に迷はされないといふことが最も大切であります。主義や主張をあれこれと追ふてゐては、結局に於いて何もつかみ得ないのです。いろ〳〵研究することは必要ですが、いつでも自分といふものをもつて、自分の教へてゐる兒童といふ具體的な現實に即して誤らないやうに主義を批判し、建設して行くといふ態度であらねばなりません。まして、國民學校に於ける綴方は、これ等の主義や主張を止揚して、より確かに、より新しく發足しなければならないものでありますから、國民學校の精神を理會し、その國民科の使命に即し、國民科國語の要旨に副つて、國語綴方の教育をうち立てゝ行くといふ態度であらねばなりません。

尙、もう一つ特に申し上げたいことは、私達の仕事は、いつでも地についた仕事であり、現實に即した研究であらねばならないと思ふのです。こんなことから考へますと、主義や主張を徒らに机の上で考へるといふよりも、先づ兒童の綴る現實相や、その生活の實相をより深く、より忠實に觀察することによつて、これ等の主義や主張を批判して行くといふ態度であらねばならないのです。

第二十一問　兒童の綴方には方言や訛語は使はせてはなりませんか

この問題は醇正國語の使用といふことが國家政策とまでおし進められてゐる今日に於いて、實に主要なる問題であると思はれます。

國語讀方、綴方、話方等は一丸となつて醇正國語使用に慣れさせようとするものであるとも見られる位に、國民學校の國語教育は特色づけられて來ました。從來の綴方指導で特にその鄕土主義的な綴方を主張するもの等に於きまして、所謂方言や訛語を使用してあることが、鄕土色があるとか、鄕土の子供らしい文であるとかいふ樣な考へ方はこの際思ひ切つて解散してしまはねばならぬ運命にあります。

しかし、入學間もない一年生や、言語の基礎的訓練の途上にある二年生等に、果して方言や

訛語を一切使用することなしに、言語表現が出來るものでせうか、更には文字による表現が出來るものでせうか、勿論理想としては、どこまでもこれ等の方言や訛語を使はせることなしに醇正國語による表現をさせねばならないのですが、これは理想であつて、現實的には仲々むづかしいことに屬するのです。ですから、初等低學年には、先づ方言や訛語もこぐ大目に見てやつて、これをゆるしながら漸次にこれを導いて醇正國語による表現をさせるやうに努力しなければならないと信じます。

尙、高學年の文章等ではこの方言や、訛語が「　」の中の言葉として、對話的な文章や、情景を描出するやうな場合によく使はれますが、これは文としての價値上より、文に眞實感を持たせようとしたものですから、むやみにこの表現をさせないやうな態度は面白くないと思ひます。しかし、それかと言つて、尙、これ等を賞讃し、これを奬勵するやうな態度はとるべきでないと思ひます。勿論、對話的な文の中で「地の文」とか、その他自分の生活を述べるやうなところで方言等を混へてあるのは、速やかに矯正されねばなりません。

で、これ等を要するになるべく醇正國語を速かに使へるやうにし、兒童を通じてその家庭環境ともどもに醇正國語使用の場たらしめて、それから兒童の綴方を生ませるやうに努力することが最も大切なことであると信じます。この仕事は勿論、大きな問題でありますが、國語の海外進出、世界進出等の事實から考へましても、私達はより一層の努力を拂はねばならないことであります。

第二章　兒童及び兒童文の見方に關する問題

第二十二問　兒童觀は教育上にどんな位置を占めますか

兒童觀といふのは教育の對象である兒童の見方の問題であることは言ふまでもありません。そこで先づ教育の對象としての兒童といふことについて考へてみませう。教育するといふことについては教育者と被教育者が豫想されます。その場合どちらが主體となるかと申しますと、教育の對象である被教育者即ち兒童の方が主體となつて考へられねばなりません。私達は毎日教室や運動場で教育をし、その全生活を捧げて教育の仕事に從事してゐるのですが、それ等の教育は凡て皇國民を錬成するため、即ち兒童を確かなる皇民として育て行くための一切の仕事でありまして、決して私達教師それ自身のためのものではありません。

兒童觀といふのは教育の直接的な對象である兒童をどの樣に觀じ、どの樣に躾けして行くかといふ教育の根本問題を決定するのに非常に大切なことです。一體人間の心性の觀方にしましても、「人の性は善なり」とする觀方、即ち性善說もありますし、「人の性は惡なり」とする觀方もあります。これは人間觀の問題ですが、若し、人の性は善なりとすれば、教育はその善なるものに對して如何に働きかけて行くかといふことが問題になりますし、人の性は惡なりとすれば又如何なる手段をもつてこれに臨まねばならぬかといふ教育の方針が生まれて來なければならないのです。

自分の受持つてゐる兒童の顏をみつめて、これ等は凡て動物だと見れば、それに從つて教育の方法も考へられて來ませうし、反對にこれ等は神の子だと思へばそれに從つて神の子を人の子にするために、皇民にするために、又適切な教育の方法が生まれて來なければなりません。

兒童を如何にみるか、その本性をどうみるかといふこと、それを如何に錬成して行くかといふことは教育をなす上の根本的不可欠の問題でありまして、一切の教育的營爲はこゝから生まれて來るものであります。早い話が、過去の自由教育思潮も、スパルタ式の教育方法も實にこの兒童觀の問題から派生した教育の方法であつたとみることが出來るのでせう。

第二十三問　從來の兒童觀にはどんなものがありましたか

前の問題で兒童觀が凡ての教育方法を左右する有力な一點であるといふことを述べました。偖、從來の兒童に對する觀方にはどんなものがあつたかを簡單に申しますと、

先づその一つに「兒童は大人の縮圖である」といふ見方があつたと思ひます。そこでは子供らしい考へ方とか、子供らしい見方等は考慮されることなく、大人になるための準備として、一切の生活行動は考へられ、時には强制されて行つたのです。一教科を教へるにしましても、その學習に對して子供が興味を持つて勉强するとか、つまらなく思つて勉强する等といふやうな個人的な考へ方や、兒童心理に即應した學習の方法等については省られることなく、たゞ將來成人となるためには、否應なしにこれだけの訓練をしなければならないといふ樣な觀點から教科の指導がおし進められて行つたのです。

次に「兒童は大人と別の世界のものである」といふ見方がありました。先に述べましたものはどちらかと言へば形式的な概念的な兒童觀でしたが、これは兒童の世界と大人の世界をはつきりと別けて考へたのです。教育するといふことは兒童のありのまゝの姿をそのまゝに伸すことだとも考へられました。とに角、兒童の世界は大人が考へてゐる樣にかたくなるものでなくもつと子供らしく潑剌としたもつと子供らしく伸々とした姿であらねばならぬといふのです。教師が教育するといふことは、その兒童の性格に從つて自由に伸ばすことであるとも考へられました。要言すると、兒童の世界は大人から考へることの出來ない變つたものである。兒童は大人の考へ方によつて、訓育することは出來ない、それは兒童の性格を殺すものであり、兒童の生活を破壞するものであるとする見方でありまして、所謂兒童中心的な觀方であります。

第二十四問　國民學校に於ける兒童觀について說明して下さい

國民學校に於ける兒童觀、これは國民學校教師の充分理解し、認識しなければならない問題です。而して國民學校に於ける兒童觀は、前の項に於いて述べました樣に、兒童を大人の縮圖と見る見方でもなく、又兒童の世界は大人の世界と別々のものであるとして徒らに兒童性をまつり上げる兒童中心主義的な兒童觀でもありません。先づ兒童といふことを考へる前に、現在

に於ける人間の解釋態度である人間觀から簡單に述べてみませう。

現在までの學問は凡て、抽象的一般的な人間の教育といふことをその教育理念とし、完全な教育、それは全人教育とも言はれますが、とに角、人が人として社會に立つて行く上に必要な教育をなしてゐたのです。ある人は教育とは「人が人を人にまで」といふ定義を下しました。即ちより教育ある人が、より水準の下位ある人間を、普遍的一般的な人にまで育て上げることだと言ひました。しかし、これについて考へますとき、抽象的、普遍的な「人」とは一體如何なるものでありませうか。世界には二十餘億の人間が住んでゐるのでせうが、それ等の人間は必ずその土地に制約された人間でありますし、その土地の風土性の中に生活し、更にその民族のもつ歴史性の中に生を享けてゐる筈であります。私達は人間でありますことに間違ひはありませんが、人間であると同時に、大日本帝國の國民として生きてゐるのであります。こゝに國家的人間觀が位置づけられるのであります。かういふ樣なところから、國民學校に於ける兒童觀について考へて行きますと、兒童は歴史的には生まれ乍らにして三千年の光輝ある歴史に傳統し來つた忠勇なる祖先の血をもつ皇國民の子孫であります。決してこの土地にポツンと生え上つた人間ではありません。從つて、兒童の心の中には否その血液の中には將來皇國民として皇運を扶翼し奉るの資質をもつてゐるものであります。又地域的風土的に兒童をみますと、彼等は生まれ乍らにして世界中のどこにもないこの皇國の風土の中に生活してゐます。四季の變化寒暑の變化の中に、しかも水陸狀態も略々一樣であるこの日本の山川草木の中に生活してゐます。で先づ、國民學校に於ける兒童觀として最初に考へなければならぬことは

兒童は生まれ乍らにして皇國民としての資質を有してゐる。

といふことであります。しかも皇國民としての資質はこれを錬成して行く間に皇國民としての精神とその行動を確實に遂行して行くことの出來る皇民につくり上げることが出來ると見なければなりません。

かういふ樣に見ますと、兒童は大人と別の世界のものでなく、又、勿論兒童は大人の縮圖でもないのであります。縮圖には發展がありません。そこには兒童性がみとめられてゐないのです。國民學校に於ける兒童觀は、兒童には兒童として大人と違つた兒童の生活感情があるものであるが、しかし、その兒童の資質はこれを教育して行くことによつて、皇國民となるといふ

觀方をしなければならないのです。こゝにはじめて教育の價値も考へられ、兒童に對する教師の認識も一層國家的に價値づけられて來るものであります。

第二十五問　よい兒童文とはどんなものでせうか

よい兒童文、わるい兒童文、これに對する見解が確立してゐないと兒童文を指導することは出來ないのですから、どんなのがよいか、わるいかの見境ひがはつきりしてゐるといふことは非常に大切なことです。しかし、このよい文、わるい文の見解はさう簡單に決定することは仲々困難なことであります。おもふによい文、わるい文を決定するのは、どうしてもそれを決める教師の主觀によつて色づけられるからであります。例へばこゝに一つの兒童文があれば、甲の教師は良とみとめ、乙の教師は優とみとめ、丙の教師は可と認めるやうなことは有り勝ちのことであります。しかし前にも述べました樣に、私達は兒童の文章の在り方を研究し、その文の性格をみつめて出來るだけ普遍的に、できるだけ客觀的に正しき評價が出來るやうにつとめねばなりません。

さて、どんな文がよい文でせうか。これは學年的にも考慮され、又、文を綴らせた目的から更には文に表現された生活とも關聯して愼重に研究されなければなりませんので一口に言ふことは仲々むづかしいのですが、幾分でも參考のために次に數項をかゝげておきませう。先づ、

1　よくわかる文章であらねばならないのです。

文はそれ〴〵の思想感情を更にはその生活を人にもわかつてもらふために書いたものであります。ですから、書いた文が何を書いてあるかわからい樣なことでは勿論よい文章といふことは出來ません。誰にでもわかるやうに、少くとも教師や友達には文章を作つた者の生活や、その思想感情がよくわかるやうに書かれてあらねばならないのです。これは至極平凡な事あげですが、實は多くの兒童文に接してゐると首尾一貫しない文や、いたづらに言葉をならべ立てゝ結局何を書いてゐるかわからない文も相當に見當るのです。次に、

2　素直な表現の文章でありたいのです。

素直な文章といふのは抽象的な言葉である樣ですが、殊更にこぢつけてでつち上げた樣な文章や、ことばに捉はれて身動きの出來ない文章や、變なことあげをした文章でなく、くせのな

い文章、讀んでみて氣持のよい文章、子供らしさの感ぜられる文章を言ひたいのです。次に、學年的發展段階から考へますと、初等低學年の兒童文は、

2　生活の事實が綴られてゐる文章がよいのです。

初等低學年といふのは初一、初二を見當としておきませう。この頃の兒童文は先づその生活に即して、それをどれだけ文字言語として表現し得るかといふことに第一次的な指標があらねばなりませんが、稍進んでは、生活のありのまゝをどれだけ文章として表現し得るかといふことにねらひがあります。從つて文章にはその生活の事實がくはしく表現されてあればよい文として認めなければならないのです。次に初等中學年(三年・四年)の文であれば、

4　生活の眞實が綴られてあればよい文章であるといふことが出來ませう。

單に生活の眞實ばかりでなく、その事實をくはしく長く表現することが出來、その事實はどこまでも子供として、皇國の少國民としてのまことな生活の姿が表はれてゐるやうな文であればよい文として認めてよいと思ひます。次に高學年の兒童の文であれば、

5　生活の眞實が語られ、しかもその生活態度のたのもしさの親はれる文章であらなければならないのです。

文を綴るといふことは、既に述べました様に、綴ることによつて生活を創造して行くことでありますから、文にはその生活の意欲が見え、その生活の姿態は皇國民としてたのもしきを思はせられる表現でありたいと思ひます。勿論、そのたのもしさにはその文に表現される生活態度のたのもしさといふことも考へられますが、それと同時にその表現のたのもしさといふことも考へられなければなりません。表現のたのもしさといふのは文の表現に即する見方考へ方の面白さといふこともありませうし、更に、味のある表現といふことも考へられませう、深みのある表現といふことも考へられませう、しかし、その上に更に國語の表現價値を幾分でもわきまへ、これを十分に驅使してゐる等といふが如き表現技巧の上にも併せ考へられなければならないのです。

第二十六問　わるい文とはどんなのでせうか

よい文章について抽象的ではありましたが、一通り述べて來ましたので、その反對がわるい

文であるのですが、尙、わるい文の性格をはつきりするために二、三の條項に從つて述べてみませう。先づ、

1　何を書いてゐるかわからない文章。

これは前に述べましたことの反對ですから說明する要もないことでせう。想の統一のない文章のことです。次に、

2　概念的な文章。

といふことです。概念的な文章といふのは大體に於いて「こゝろ餘つてことば足らず」の文章か「ことば餘つてこゝろ足らず」といふ樣な文です。人に例へて言へば骨と皮ばかりで中味のない文章です。讀んでみて何の面白味もなく、その人らしい個性味も窺はれない文章です。もつと言へば、こんな文章であれば、どこの誰につくらせても出來るやうな型に捉はれた文章です。次に、

3　徒らに言葉に捉はれて言葉の羅列に終つてゐる文章です。

これは前項の概念的な文章の部類に屬するのですが、兒童の文にはことばに捉はれて自分の思つてゐることを素直に表現することが出來ないのみならず、自分で思ひもしなかつたこと、自分で感じもしなかつたことを思つた樣に書いたり、感じもしなかつたことを所謂よい言葉をつかつて感じた樣に書き、ことばの空廻りをさせてゐる樣な文をまゝ見受けます。しかして、これは所謂過去に於ける形式主義的な綴方教育の遺物ですから餘程注意して指導されなければなりません。次に、

4　文によつて生活の窺はれない文章もわるい文章です。

綴方は兒童の生活を中心として……といふことは敎則にも規定されてあることです。ところが文によつては、兒童の生活が窺はれないで、子供らしい意欲も生活をして行く感情も全く讀まれない文章、あゝこの子供はこんなことを考へたか、こんなにまで一生懸命に頑張つたのか、こんなところにまで氣をつけてみてゐたか、等のやうにその子供の生活感情や、生活姿態が讀まれない文があります。こんなのはいけないのです。

尙、その他言葉使ひの正しくない文章、方言や訛語の多い文章、假名遣や句讀點その他改行の不統一な文章、皇國民として見方の間違つてゐる文章、文の表現によつて窺はれる生活態度

の誤れる文章等々數へ上げると幾らでも言あげをすることが出來るのですが、この項ではこの位にして、この著書を讀まされて諸兄の賢察を乞ひ、兒童文の善惡を判斷される素地を培はれることを希求して止みません。

第二十七問　兒童文の見方には一定のきまりがありますか

一定の規則といふ程のものはありません。しかし、先づ何を措いてもその兒童文が價値ある文であるか、無價値なものであるかといふことの判斷は出來なければならないでせう。これは前項に述べたところから御推察下さるやうにお願ひします。次に私達が兒童の文章を觀る場合に於ける一般的な注意とでも言ふことについて述べませう。先づ、

1　綴らせた目的に從つて見ること。

何んのためにこの文を綴らせたか、教師の要求する文が出來てゐるか等を考へて讀まねばならぬことは事改めて喋々する必要もないでせう。一面から言へば綴らせた目的に適つてゐる文はよい文としての價値を持つものでもあるのです。次に、

2　文の表現によりその生活をみること。

綴方は生活の表現でありますから、その文を讀むことによつて、その兒童の生活を讀むのに最も都合のよい教科でもあります。綴方に言ふ生活指導といふことも、廣い意味に於いてはその文によつて、文を通じてその生活をみつめ、これを適正に指導することであります。しかして適正に指導しようとなれば出來るだけくはしく、出來るだけ懇切に、その一言一句にも注意してその表現から、その兒童の生活を、更にその兒童の性格を知るやうに努めなければなりません。次に、

3　兒童文によつて當該兒童の表現の癖をみること。

「なくて七癖」といふ諺がありますが、人にはよかれ惡しかれ、いろ〳〵の習癖があります。よい癖はこれを助長しなければなりませんが、惡癖はなるべく早くこれを矯正しなければなりません。ところで文章にも注意してみると實にいろ〳〵の癖があります。言葉をかざる癖、言葉をもてあそぶ癖、みだりに對話的に表現しようとする癖、つとめて面白く書かうとする癖、等々所謂、能文な兒童にもそれに即してよくない癖があります。これ等の癖を早く發見して當

該兒童に即し、又それが學級兒に通ずる弊害であれば學級全體の兒童に注意して、指導しなければなりません。尙、假名遣、その他漢字等につきましても注意してみれば、ある一人の兒童の漢字、假名遣等は大體どの文にも共通して間違つてゐるのですから、これ等にも意を用ひて指導することが緊要です。

第三章　文の題材とその指導法に關する問題

第二十八問　文の題材はどんな範圍から取材させたらよいでせうか

教則には「綴方ハ兒童ノ生活ノ中心トシテ……」と規定されてあります。これは綴方がその生活に基調するものであること、共に綴方の題材の範圍をも規定してゐるのであります。從つて綴方の題材は兒童の生活のあらゆる場面から取材されるやうに充分な工夫をしなければなりません。しかしてこのことに關しましては從來から「取材を偏よらないやうに」といふことが綴方指導上常に注意されたことでしたが、ともすると生產活動參加が時代的に叫ばれると、もう何も彼も生產活動の參加の文でなければ綴方でないとされたり、一切の綴方は凡て皇軍將士への慰問文の指導一點張りになつたり、又時には家庭の生計問題について綴つたものでなければ綴方でない樣にも考へられないでもありませんでした。然して、これはその何れにしても

當を得たものでないといふことは言ふまでもありません。

そこで、「生活を中心としてあらゆる場面から取材させる」と言つても雲を掴む樣で焦點のないことばでもありますので、兒童の生活の場所を先づ次のやうに考へてそれ等の生活の場面から取材させる樣にすることが肝要なことであると思ひます。

1　家庭生活の中から
2　學校生活の中から
3　特に國家的生活の中から
4　行事に關聯する生活の中から
5　自然の推移にある生活の中から

勿論、こゝに掲げましたことの中、例へば國家的生活として考へられる紀元節、天長節、大詔奉戴日等に於ける生活は、家庭生活、學校生活にも關聯を持つことは云ふまでもありません。

尙、これ等の生活の場に即して、

1　遊びの生活
2　仕事をした生活

等を表現させることにも留意しなければなりませんしこれに働かせる感覺面から言へば、

1　見たことを中心として、（視）
2　聞いたことを中心として、（聽）
3　感じたことを中心として、（心）
4　讀んだことを中心として、（想）
5　行動したことを中心として、（體）

等のやうにとり上げることが出來ませう。

以上取材の範圍をいろ〳〵とあげて來ましたが、要するにあらゆる生活の場に即して、しかもあらゆる感覺を働かせて綴らせるやうな題材を選ぶやうにすることが大切であります。

第二十九問　毎月に於ける文の題材となるものを具體的に擧げて下さい

文の題材となる生活と言ひましても、低學年、中學年、高學年等のやうに學年的に、その精

神發展の段階に於いて種々と考慮されなければなりませんから、例へば、七夕様の題材が初一の文題となつても、それが直ちに初五、六の題材とならないことは言ふまでもありません。しかし考へ方によつては、ある生活事象によせる生活感情、ある事象による見方、考へ方の發展こそ綴方に於ける生活指導であり、見方、考へ方の指導でありますので、初一の兒童が七夕様を題材としても、この題材を初五、六の高學年の兒童に書かせても、勿論、生活題材としては當を得ないことではありません。即ち初一、二の兒童は七夕様をおまつりする時の生活行動を中心として綴りませうし、高學年の兒童は又これに對する思ひ出、これに對する行動をより程度高く表現するでありませう。

次に毎日に於ける文の題材となるものを生活行事や、季節等と關聯して掲げることにしませう。

四月の文材		
一日	入學式　始業式	
三日	神武天皇祭	
季節の動き	○きれいな草花が野原に咲きみだれる ○櫻が咲き、花見の人がたくさん出る	

行事		
上旬	先生の新任式　告別式	
八日	大詔奉戴日　灌佛會	
廿七日	結核豫防日	
廿九日	天長節拜賀式	
三十日	靖國神社祭	
季節の動き	○小鳥の鳴き聲を聞く ○細い春の雨が降る ○つみ草に出る人を見かける ○ふなつりが始まる ○おぼろ月の夜が多くなる ○すべてが春だといふ氣持のする頃	

文のたねと詩のたね		
季節	春の風　おぼろ月　日がさ　かすみ　花曇　鳥の聲　春の野　日永	
動物	ひばり　うぐひす　てふ　毛虫　春の小鳥　ひよこ　目高　おたまじやくし　ふなどじやう	
植物	若草　櫻　椿　なたね　桃　豆の花　たんぽゝ　つくし　わらび　すみれ　アネモネ　チューリップ	
食べ物	竹の子　豆　菜　つくし　わさび　わらび　よもぎ	
遊び	花つみ　花見　わらび取　つくし取　ふなつり　山のぼり	
勉強	新しい本　ふえた學科　はじめての理科の時間　新しい先生に習つて　今年一年間の勉強の仕事　新學年の覺悟	
仕事手傳	子もり　さうぢ　麥の手入　お使	

ね

手紙日記　別れた先生へ　花見に人を招く　進學の喜びを知らせる　竹の子の成長日記
お手傳日記　學級日記

五月の文材

行事

四日　護國日
五日　端午の節句
八日　大詔奉戴日
上旬　健康週間
上旬　旅行　遠足
廿二日　青少年學徒ニ賜ハリタル勅語御下賜記念日
廿七日　海軍記念日
下旬　春の運動會

季節の動き

○木々の綠がまして美しくなる
○五月雨が降る
○麥が黃色くみのつてくる
○野べの草花が美しく咲き亂れてゐる
○麥笛を吹く音が聞えてくる
○鯉のぼりが靑空を高く泳いでゐる
○ごことなく夏らしくなつてくる（初夏）

た

季節　葉櫻　新綠　鯉のぼり　しやうぶ湯　春の野　苗代　麥の色　武者人形

動物　かへる　かたつむり　金魚　かぶと　みゝず

植物　れんげ草・すみれ　つゝじ　しやくやく　ふぢの花　ぼたん　いちご　まめ　あやめ

ね・詩のたね

食べ物　たけのこ　えんどう　そらまめ　いちご　かしわもち
遊び　効外進出　かくれんぼ　石けり　麥笛　魚つり
勉强　すきな學科　旅行地の勉强　春の自然觀察　私たちの村　讀んだ本の色々
仕事手傳　蠶の世話　桑つみ　大さうぢ　茶つみ　豆とり　麥刈　苗代つくり　種蒔
手紙日記　慰問文　旅行の樣子を知らせる手紙　健康週間日記　蠶の日記

六月の文材

行事

八日　大詔奉戴日
十日　時の記念日
十一日　入梅（つゆの入り）
二十日　夏至
三十日　大祓

季節の動き

○木の綠がだん〳〵こくなる
○田植に急がしく働く人の姿が見られる
○雨の降る日が續く（梅雨）
○田に水が漲り蛙の聲が嬉しさうに聞かれる
○金魚賣の聲を聞きはじめる
○夏服・夏帽の人達の姿を見かける
○螢がとび、蚊が出はじめる

文

季節　梅雨　田の水　小さい苗　螢の光　初夏の風　靑葉　雨上り　夏雲

の・ね・た・の・詩・ね・た・の	動物	つばめ　ほたる　毛虫　金魚　かたつむり　蛙　とんぼ　はつせみ　へび　蚊　ひる　蠶
	植物	あやめ　ゆり　柿の花　梅のみ　かんらん　けし　ざくろ　桑のみ
	食べ物	夏みかん　きうり　青梅　アイスクリーム　ラムネ　桑のみ
	遊び	ほたるがり　魚つり　蛙つり　水遊び
	勉強	すきな本　書取
	仕事手傳	麥刈　麥打　苗取　田植　子守　蠶の世話　夏の果物つくり
	手紙日記	慰問文　田植の手傳を頼む手紙　田植日記　梅雨日記　お手傳日記

七月の文材	季節の動	○大へん暑くなる ○入道雲が出る、雷がなつて夕立が降る ○夏の果物が店先に並べられるやうになる ○苗が大きくなつて青々とした田が續く ○木々の緑が濃くなる ○蟬の鳴き聲がやかましく聞かれる

行事	七日	七夕祭　事變記念日
	八日	大詔奉戴日
	十三日	于蘭盆會
	十五日	中元
	廿日	海の記念日
	卅一日	一學期終業式　通知簿渡

の・ね・た・の・詩・ね・た・の	季節	雷　入道雲　夏風　虹　日中の暑さ　夏の木立　うちわ　扇　ひるね　夜店
	動物	せみ　へび　蛙　とかげ　蚊　蟻　蠅　ぼうふり　金魚　ふな　あゆ
	植物	朝顏　ほゝづき　月見草　なんきんの花　すゐくわ
	食べ物	きうり　すゐくわ　トマト　なす　なんきん　氷　アイスクリーム
	遊び	蠅取　水泳　魚取　蛙つり　かくれんぼ　虫取　せんこ花火
	勉強	夏の觀察　綴方會　しやせい
	仕事手傳	田の草取　果物とり　店ばん　せんたく　墓參り
	手紙日記	慰問文　暑中見舞　夏雲の日記　昆蟲採集日記　せみとり日記

八月の文材	季節の	○暑苦しい日がつゞく ○入道雲が出る、雷が鳴つて夕立が降る ○蟬の聲がやかましい ○夕涼みの人が多い

行事	一日	夏季鍛錬休暇に入る
	八日	大詔奉戴日
	一日——二十日	ラジオ體操會
	其の他	

九月の文材		
事		鍛錬會 招集日 夏祭
文のたねー詩のたね	季節	暑さ　夕立　雷　夏雲　天の川　夜空の星　虹　うちわ　夜店　ひるね
	動物	せみ　へび　蛙　とかげ　毛虫　こがれ虫　蚊　日ぐらし　ふな　あり
	植物	すゐくわ　きうり　なす　ほゝづき　トマト　なんきん　朝顔　夕顔　月見草　つゆ草
	食べ物	なす　すゐくわ　サイダー　トマト　きうり　ぶどう　氷　アイスクリーム
	遊び	水泳　せみとり　魚取　花火　舟遊び　水遊び
	勉強	昆蟲採集　植物採集　夏休學習帳　いろ〳〵の研究　しやせい
	仕事手傳	草引　水くみ　せんたく　店ばん　果物とり　田の手入
	手紙日記	暑中見舞、鍛錬日記
	動き	○ゆかた着の人の姿が見られる ○川原に遊ぶ子供が多くなる ○夜の空は特に美しい ○夏祭が時々行はれる

行事		
一日	始業式　震災記念日　二百十日	
八日	大詔奉戴日	
十八日	滿洲事變記念日	
二十日	彼岸入	
廿三日	秋季皇靈祭　秋分	
文のたねー詩のたね	季節	初秋　殘暑　颱風　露　天の川　夜空の星　虫の聲　秋雲
	動物	蟬　ひぐらし　かまきり　ばつた　うんか　いなご　赤とんぼ　くつわ虫
	植物	ダリヤ　コスモス　はぎ　のぎく　ききやう　けいとう　おみなへし
	食べ物	ざくろ　ぶどう　はすのみ　なし　氷
	遊び	水泳　とんぼ釣　花火　虫とり　魚とり
	勉強	昆蟲や植物採集の整理　しやせい　始業式の訓話　夏休の作品展覽會
	仕事手傳	桑つみ　草引　蠶の世話　稻の害蟲とり　墓參　墓掃除
	手紙日記	慰問文　詩の日記　養蠶日記　虫とり日記
	季節の動き	○だん〳〵涼しくなるが殘暑がある ○すんだ青空の日が多くなる ○ちぎれ雲が走る ○赤とんぼがとぶ ○いろ〳〵の虫の聲が聞かれるやうになる ○颱風の吹くことがある ○きれいな秋の草花が咲き出す

十月の文材

行事

八日　大詔奉戴日
十三日　戊申書御下賜記念日
十七日　神嘗祭
三十日　教育勅語御下賜記念日
其の他　運動會　遠足　氏神祭

文の題材・詩の題材

季節
- ①清くすんだ青空の日が多くなる
- ○ちぎれ雲が走り、赤とんぼがとぶ
- ○稲穂がのび、木の實がうれる
- ○美しい月夜が多い
- ○夜が長くなり讀書によい
- ○きれいな虫の聲が聞かれる
- ○すべてが澄んだ感じのする頃である

動き

季節	秋空　秋の月　秋日和　秋の雲　夜空　秋風　かゞし　鳴子　月見
動物	こほろぎ　赤とんぼ　もず　ほゝじろ　とび　すゞめ　松虫　すゞむし
植物	コスモス　菊　すゝき　いてふ　はぎ　かき　くり　椎のみ
食べ物	かき　くり　きのこ　いも　大根
遊び	陣とり　月見　たにし拾ひ　山登り　椎のみ拾ひ　虫とり
勉強	野外勉強　運動會の計劃と記錄　しやせい　讀書
仕事手傳	柿とり　くり拾ひ　きのこがり　いも掘り　落葉かき　大根の手入

十一月の文材

行事

三日　明治節　體育日
八日　大詔奉戴日
十日　國民精神作興詔書御下賜記念日
廿三日　國民精神作興週間
新嘗祭

文の題材・詩の題材

季節
- ○山々がきれいに色ごられる
- ○きりの朝、露の降りた朝が多い
- ○青いまでに澄み切つた秋晴の日が多い
- ○美しく月がさえる

動き
- ○菊の花が滿開になる
- ○稲田がみのり　木々の實がみのる
- ○稲刈が始まり田に働く人の姿が忙がしい

季節	朝つゆ　きりの朝　秋晴　小春日和　しぐれ　秋の野　虫の聲　紅葉　落葉　野山の色づき　秋深し
動物	もず　ひよどり　とび　目白　きじ　かうもり　こほろぎ　いなご
植物	菊　野菊　もみぢ　びわの花　サルビヤ　錦　落葉
食べ物	みかん　かき　くり　大根　ゆず　いも

ね

手紙日記　慰問文　祭に招く手紙　雲の日記　詩の日記　祭の日記　月の日記

の　た　ね

遊び	柿とり　くり拾ひ　もみぢ狩　菊見　雀とり　いなご取　山のぼり　たき火
勉強	明治天皇御製御盛德の勉強　しやせい大會　體育日と運動
仕事手傳	稻刈　稻こぎ　稻かけ　もみすり　麥まき　霜よけつくり　大根引
手紙日記	慰問文　落葉日記　勤勞日記　夜なべ日記　國民精神作興週間日記

十二月の文材

行事

八日	大詔奉戴記念日
十四日	義士祭
廿二日	冬至
廿五日	大正天皇祭
廿一日	冬季鍛錬休暇に入る
下旬	大晦日　大祓
	年の市　正月の準備

の文

季節	寒風　氷　みぞれ　木枯　ふゞき　冬枯れ　冬木立　枯野　こたつ　年の暮　正月の用意	○寒風が吹き、雪を降らせる ○霜の朝が多くなり水が凍る ○野原が枯れて冬に入る ○所々にたき火が始まる
動物	うさぎ　すゞめ　かいつぶり　ひよどり　かも　水鳥　つぐみ　にはとり	○年の暮で何となくあわたゞしい ○すべてが冬らしくなる頃である ○たこ上げ、こま廻し等正月の遊びが始まる

た　ね・詩　の　た　ね

植物	なんてん　かんぎく　さゞんくわ　やつで　すゐせん　枯草　落葉
食べ物	山鳥　牛肉　さけ　りんご　みかん　つるしがき　おもち
遊び	カルタ　すごろく　雪だるま　竹馬　たこ上げ　こま廻し　手まりつき　縄とび　グライダー
勉強	文集つくり　綴方會
仕事手傳	すゝはき　餅つき　薪とり　落葉かき　縄なひ　正月の用意　大掃除
手紙日記	慰問文　戰地への年賀狀　雀の日記　冬の觀察日記

一月の文材

行事

一日	新年拜賀式　四方拜
二日	初荷書初
六日	第三學期始業式　寒入り
七日	七草祭
八日	大詔奉戴日
九日	入營兵見送

季節の動

○雪が降る　氷は張る
○屋根も道も眞白に霜が降りる
○梅のつぼみがふくらみ始める
○南天のみが赤い
○山に炭燒の煙が見られる
○寒行の人の姿を所々に見受ける

十四日	かぎり燒き	○たこが寒空に上つてゐる
十六日	やぶ入り	○人々が寒さうに首をちゞめて歩く

文の たねとなる 詩の たねとなる

季節	雪の朝　ふゞき　雪の山　つらゝ　氷　雪の夜　初日の出　かど松	
動物	うさぎ　すゞき　ねこ　小犬　目白　にはとり	
植物	うめ　なんてん　七草さゞんくわ　かんぎく	
食べ物	ざうに　お餅　七草がゆ　かずのこ　つるしがき　みかん　かきもち	
遊び	かるた取　すごろく　トランプ　たこ上げ　なわとび　雪合戰　雪だるま　こま廻し　はねつき　竹馬	
勉强	書ぞめ　冬休の學習日記　かんげいこ　算術の時間　寒い體操	
仕事手傳	麥ふみ　なわなひ　お使　正月の買物	
手紙日記	年賀狀　慰問文　氷の日記　風の日記　正月の行事日記	

二月の文材

行	季
三日　節分　豆まき	○雪降りが多くなり霜が眞白に降りる ○池や川に氷がはりつめる

事	節の動き
八日　大詔奉戴日	
十一日　紀元節　拜賀式	
下旬　耐寒訓練	○早咲きの梅の花を見かける ○遠山の雪がなか〳〵消えない ○芝燒、枯草燒が所々で行はれる ○道を歩く人の姿もまだ寒さうである ○川原の柳の芽がふくらみ出す

文の たねとなる 詩の たねとなる

季節	雪の日　雪ごけ　遠山の雪　雪の夜　氷　霜の朝　たき火　つらゝ　ふゞき
動物	雀　犬　猫　にはとり　うさぎ　カナリヤ
植物	水仙　福壽草　梅の花　溫床の苗　鉢植の花　木の芽　柳　はぼたん
食べ物	節分の豆　みかん　いり豆
遊び	雪合戰　雪だるま　たこあげ　お手玉　トランプ　竹馬　日向ぼつこ　雀とり
勉强	學藝會のけいこ　讀方の時間　冬の天候しらべ
仕事手傳	夜業　お使　庭はき　麥の手入　針仕事
手紙日記	學藝會の案內狀　慰問文　うさぎ日記　にはとりの日記　雪の日記

三月の文材

行事	三日	桃の節句　ひな祭
	六日	地久節　母の日　母の週間
	八日	大詔奉戴日
	十日	陸軍記念日
	廿一日	春季皇靈祭
	上旬	學藝會
	下旬	彼岸
		卒業式　終業式
文の題材	季節の動き	○だん〳〵春らしくなつて暗くなる
		○草や木の芽がぐん〳〵大きくなる
		○早咲きの草花が見受けられる
		○遠くの山がかすんで見える樣な日がある
		○小鳥の鳴き聲たきく
		○細い春の雨が降る
		○田圃に働く人、つみ草に出る人などの姿をたくさん見受けるやうになる
たねの詩	季節	春の日　春風　雪ごけ　水温む　日永　かすみ　かげらう　春の空
	動物	うぐひす　小鳥　ひばり　雀　にはとり
	植物	桃　チューリップ　れこ柳　アネモネ　若草　木の若芽　つくし　つばき　よもぎ　せり
	食べ物	くさもち　三月大根　さんしよの芽　しゆんぎく　はまぐり　しゞみ
	遊び	つみ草　かくれんぼ　戰爭ごつこ　たこ上げ　こま廻し　つくし取

たねの	勉強	しけん　綴方會　最後の讀方の時間　しやせい　新しく買つた本
	仕事手傳	温床つくり　縄なひ　種まき　植ゑかへ　墓參り　若芽つみ　麥の手入
	手紙日記	慰問文　卒業を知らせる手紙　木の芽日記　一年間の日記のまとめ

第三十問　時局的な綴り方とはどんなものでせうか

「時局的」といふことばは非常に多く使はれてゐますが、これ程漠然たることばはないでせう。單に「時局的」といふことを廣く解釋しますと「時代的」とも考へられます。さうすると現在に生活してゐる人は凡て時代的に活きてゐるのです。例へ仙人の眞似をしたり、古典的な生活を慕つたりしてゐる生活者があつたとしても、それはやつぱりこの時代のものであるといふ範圍に於いて時代的であるわけです。ところで、私達がその日常で時に「時局的生活」と言へば、所謂戰時體制下にある生活態勢的であるといふことを豫想して言つてゐる樣です。つまり、戰時下に於ける生活は平時に於ける生活と變つた點があらなければならないので、我々の生活の中から特に戰時下らしい生活態勢、特に戰時下らしい生活精神の表れるやうな行動面

を、時局的生活體制として考へてゐると思ひます。

時局的の言葉を斯ういふ様に解釋して行きますと、綴方にも亦當然時局的な綴方が生まれなければなりません。

偖、それでは時局的な綴方とはどんなものでせう。一口に言つたら、戰時體制下らしい生活の表れた綴方はすべて時局的な綴方であると言はれませう。今所謂時局的な綴方表現をその種類から考へますと、

1　皇軍將兵慰問の文
2　出征將兵見送の文
3　歸還兵出迎の文
4　東亞共榮圏内の子供への文
5　生産活動參加の文
6　勤勞奉仕參加の文
7　科學生活に關しての調査文

等々のやうにいろ〳〵の部面からあげられるやうですが、これ等のやうに特に時局的な文の種類といふことゝ、ともに文の内容に所謂時局下らしい生き方が現れてゐる文も亦、時局的な文として考へられなければならないのです。

例へば、兒童の遊びの生活に、戰爭ごつこがあり、その文の中に部隊長が活躍し、兵士が白兵戰をしたことを綴つた文であれば、私達はなる程時局だと感ずるでせうし、これを時局的な綴方だと言ふことに躊躇しないでありませう。又、單なるまゝごと遊びの文にしても、ある家のお父様が出征してゐられる所など文に表はされてあつたら、これも亦材料は「まゝごと遊び」でありましても、時局的な文であらねばなりません。

かういふやうに考へて行きますと、所謂時局的な文といふのは、いかなる種類の文にしてもそれが表れるものであります。

第三十一問　どうすれば時局的な綴方が生まれるのでせうか

前の問題で大體見當がつかれると思ひますが、一應御答を致します。先づ文題として所謂、

時局的な生活を綴るやうな題材を指定して綴らせることがその一つの方法でありませう。

次により大切なことは、兒童の生活の中に、所謂時局的な生活態度を培つてやることであります。言ひ換へると兒童の生活を時局的に設營するといふことが大切であります。兒童の生活を時局的に運營してやるためには先づ何よりも彼等の生活に時局的認識を深めてやることです。その具體的な方法としては、

1　新聞の讀み合はせと、その切り抜き掲示
2　ラジオのニュースの話し合ひ
3　週報、寫眞週報類の閲讀
4　戰爭に關係ある地圖類の蒐集作製
5　これ等に關する時事講話と生活設計

等がありませう。

兒童はこれ等の作業の間に、これ等の文を讀む間に、教師から戰爭のニュースを聞く間に、時局的な生活態勢が形成されて行くものであります。つまり時局に處する心構をつくつてやるのです。

人によれば、せめて子供にだけはさうまで、せつぱつまつた感情を持たせなくて、ゆつくりと子供らしくのんびりした生活をさせた方が大國民が出來る等と大きく構へてゐる方もあるやうですが、先づ「兒童にだけは」といふ考へ方そのものから檢討されなければならぬと思ひます。即ち我々大人から、みた「兒童にだけは」といふことばの中には、大人の世界と、子供の世界を別々なものと考へてゐる兒童觀に基調してゐると思はれるのです。實は既に述べました樣に、國民學校精神による兒童觀は兒童性をみとめながらも、その兒童はあくまでも大人になる質をそなへたものであり、皇國民としての資質を備へたものと觀てゐるのであります。さうしてその資質を錬成して忠良なる皇國民とすることが私達の仕事であります。

實の所、兒童は、現在に生活してゐる兒童は決して「私はのんびりと暮したい」等と考へてゐるのではありません。彼等に戰爭の話をしてやりますと、目を丸くして、體をのり出して聞きます。目の色が顏の色が變つて非常な緊張を示します。彼等はむしろ大人より以上な眞劍さで時局の子供として、否、彼等の考へる皇國民として、その凡ての生活を時局的に運營して行

かうと意欲してゐます。寒かつても、兵隊さんのことを思へば靴下をはくことも辛抱出來ます。鉛筆の短いのに柄をつけて使ふことをむしろ一つの樂しみとしてゐます。私の學校では毎冬の嚴寒中に、若草山の頂上まで午前八時から强歩訓練があるのですが、これをなす意氣は教師にも乏らず、その歩行力も實にすばらしい成績を示します。大東亞戰爭の眞只中の今年の意氣は例年に比してより以上なものがありました。とに角、子供は時局的な生活をすることも、實に名利を超越して敢てなすのです。私達はこのもり上る兒童の生活意欲を導いてより價値的により建設的に時局に對處する彼等の生活態勢を導いてやらなければならないと信じます。

第三十二問　文の樣式にはどんな種類がありますか

文の樣式といふのは、正しく言へば、文表現の樣式と思はれますので、そのところでお答をします。

文の表現樣式にはいろ〳〵あると思ふのですが、大體次の八種類位になると思ひます。即ち

1　日記文

毎日の生活を書いたもので、その中に日々の生活に從つて、その行動を表現するものです。勿論內容的には感想的なものや、隨筆風のものもある譯です。

2　手紙文

相手を豫想して自分の生活や、その他の用件等を知らせるもの。

3　生活文

自分の生活を文として表現したもの、隨筆や紀行、その他感想文等もこれに加へられます

4　實用文

作者の所見を社會に知らせようとするもの、記錄、意見、提案等これに屬します。

5　小說

第三者的に生活を組識づけた表現、童話、少年小說等もこれに入れられます。

6　童詩

兒童詩、俳句、和歌、その他の韻文。

7　脚本

生活を對話的に動作を中心として組識づけた表現。

第三十三問　科學的綴方とはどんなものですか

科學的綴方といふのは、實は嘗ての文藝至上的な綴方に對して、より科學的に、より客觀的に知性をとりあげて、綴文させようとする主張でありまして、兒童の生活に於ける事物現象をより客觀的に調べあげさせて、これを綴文させることによつて、國語表現の能を修練すると共に、生活を科學的に建設させようとするものであります。

しかして、この科學的綴方は前に述べましたやうに、近時の科學心の啓培といふ角度から、より積極的に推進させねばならぬ一面でもあります。

科學的綴方はその內容的な性格から、理數科理科と關聯する部面が非常に多いのでありまして、その取材の傾向に於いても、

繼續的な觀察日記
研究觀察の綴方
○○の研究

といふ樣なものがとられるのであります。

尙、この科學的綴方の標榜する形式的な面として、表現の適確なる修練、簡潔にして要を得たる文の修練等のやうに表現の科學性といふこともとり上げられてありますが、これは特に科學的綴方のみに限られた問題ではありませんので、こゝでは特に取材傾向について、以上のことを說明しておきます。

第三十四問　繼續觀察の綴方の材料はどんなものがよいのですか

研究を繼續させ、これを文に表現させるためには、兒童に興味的なものであり、これを敢てなすだけの意欲の燃えさかるものであらねばならないことは言ふまでもありません。勿論、こゝで言ふ興味といふのは、單に「面白い」といふのでなく、これを研究し、觀察して行くことが、眞に興味的に行はれるものであらねばならないといふのです。

さて、それでは、どのやうなものが兒童の興味をもつて迎へられるかといふと、先づ、

1　成長の速やかなもの、

例へば、「とうもろこし」「たけのこ」等のやうにその成長が速かなものは非常な興味をもつてしらべて行くのです。

2　變化の著しいもの

長時間かゝらねばその變化が見えないものや、變化しても實に少しづゝしかわからないやうなものは興味的ではありません。具體的な例をあげますと、「かひこ」の飼育とか、「もんしろてふ」「せみ」「かへる」等は變化の著しいもので、これを觀察する興味も湧いて來るものです。

尙、これは興味的であるといふことゝ、直接的な關係はありませんが、觀察させる材料は

3　どの兒童にも容易に觀察されるもの

であることが必要です。勿論、一寸觀察されないやうな珍しいものに對しては、觀察の興味は湧くものでありますが、どの子供にも容易に觀察させることが出來ないといふことは、全體の兒童の學修を妨げることになります。しかして、どの子供にも容易に觀察させることの出來るものは、

4　季節的關聯の生活から選ぶこと

といふことが是非必要な條件となつて來ます。季節關聯のものであれば、どの子供もいたるところで觀察することが容易であることは言ふまでもありません。

第三十五問　繼續觀察の綴方の材料を學年的にあげて下さい

繼續觀察の綴方は「自然の觀察」「理科」等と關係して指導されることが一番容易であり、又最も望ましいことであります。しかし、理科のための綴方指導といふのでは、勿論ありませんから、理科の教材の中から、前項に掲げた樣な角度から決定選擇することを忘れてはなりません。以下初一より高二までの學年的な材料を參考のために掲げませう。

	第一學期	第二學期	第三學期
初等	さくら たんぽぽ	朝顏 お月樣	冬の天氣 梅の花

一年	麥 （これ等の變化について話させる）	いれ 紅葉 （話させることから記述にう つさせる）		
初等二年	季節だより （「自然の觀察」との關聯） へちま、たうもろこし、麥の種まき なたねの花と實	へちま、たうもろこしの取り入れ 菊の花	寒暖計 たこあげ 冬の野原	
初等三年	身體檢査 おたまじやくし つばめ 夏の一日	こほろぎ せみ 秋のひるとよる 柿の色、栗の色	雪の積り方、とけ方 このごろの天氣 やなぎの芽	
初等四年	身體檢査 青虫とてふ 苗代の苗 夏至 影の長さのしらべ	くも あぶらぜみ つばめ 鳴く虫のいろ〳〵 秋分、冬至	冬のひるとよる 氷の厚さ 温床の温度 春分	

初等五年	かひこの發育（卵から蛾まで） たけのこの成長 つばめの生態、習性 いれ 蚊（ボウフリから成虫まで）	きのこの研究 柿、柿の實の研究 いれ いれの害虫の研究	慣性の研究 自轉車の研究 時計の研究	
初等六年	種子の發芽の狀態 （いれ、麥、大豆、小豆、豆、朝顔、等の比較研究）	種子の散布の狀態研究 （たんぽ、ぬすびとはぎ、いのこづち、その他）	尿と汗の研究 身體運動と體温 食物と衞生 電燈の明るさ	
高等一年	養蠶日記 植物の根と葉の働 夏と身體	初秋の日記 稻の害蟲の研究 運動と血液の循環	力と運動の研究 器械と仕事の研究 火の焚き方の研究	
高等二年	鳥の聲の研究 顯微鏡による研究 飲料水の研究	比重と浮沈の研究 仕事と汗の研究 大氣の壓力の研究	呼吸と空氣 太陽と月の運行 燃料と火力の研究	

注意（一、二年では、觀察のための綴方といふのでなく、兒童の生活を觀察態度に導くことが大切である）

第三十六問　日記の指導は何年から始めたらよいでせうか

毎日必ず日記をつけることは非常に教育的な効果のあるものですが、さてこれを續けさせることとなると、仲々簡單には行かぬものです。そこで何年生位から始めるかといふ問題が起つて來るものですが、その方法として考へさへすれば、一年生から始めて決して無理なことではありません。否、一年生から始めねばならぬことであります。その初歩的なものは後でくはしく說明する所がありますが、(第四十問)所謂繪日記です。次に、二年、三年頃になると、ある特定な時期、例へば夏休みとか、冬休みとかに書かせるやうにするのです。

尙、この指導は國語讀本との聯絡を十分考へて行かねばなりません。國語讀本では卷三の十七に「日記」といふ文があつて、夏休を前にしての數日間の日記が揭げられてありますから、この教材の指導と相俟つて、初等二年の夏休前に日記をかくやうに話して聞かせ、その要領を實際に記述させてのみこませるやうにすることが大切です。

第三十七問　日記をつけさせることは教育上どんな價値がありますか

誰でも日記をつけさせることが非常に大切なことであるといふことは考へてゐますが、さてそれではどんな價値があるかといふことについては事改めて考へないものです。それも日記の性格として、誰にも見せられないやうな日記であれば、一寸問題外ですが、國民學校の兒童に日記をつけさせるのは、言ふまでもなく教師指導の下に行はれなければなりませんので、教師としてはその價値について檢討しておく必要があるのです。

偖、日記をつけさせることの教育的價値を先づ教育全體の面から考へますと、

1　生活を反省する態度をつくる。

といふことが先づ考へられます。日記をつけるためには、その日一日の生活行動を靜かに反省しなければなりません。生活を反省することによつて、あのことはよいことであつたとか、あれは惡かつたといふ樣な子供なりな批判態度も出來て來ます。それについで、

2　よりよき明日の日の生活を構築させる。

といふことになります。私達の生活は、さうして子供の生活は、いつも不完全なものです。しかしその不完全なものから一歩でもよりよく生きて行かうとするところに、生活の意欲も生まれて來るものです。今日の生活で例へば失敗したことがあれば、明日の生活では再びやらないやうにと新しい意欲を起しませうし、今日先生から賞められたら、明日も再び賞められようと意氣込みもすることでせう。次に、

3　繼續的、努力的、精神態度を涵養する。

といふことが考へられます。日記をつけることは、決して並大抵な根氣では出來ません。日記帳を新しく買つて、始めの二、三日間はていねいにその日その日を記錄して行つても、一ケ月たち二ケ月經つて行く中にはついこれを書くことが臆劫になり、とうとう中止してしまふといふやうになり易いものです。しかし、日記をつけさせる以上は、それが一年計畫のものであれば、どんなことがあつても一ケ年續けさせなければ、教育的に罪を犯してゐるといふ樣なことにもなります。ですから日記をつけることそのことと附隨して、より努力的な、より繼續的な精神態度を錬成して行くことが出來るものです。次に、

4　生活事象に對する見方、考へ方を指導することが出來る。

日記をつけるためには、その生活に即して、生活事象に對してよく見、よく考へることが必要になつて來ます。生活事象に對する見方、考へ方の指導は、大きくまとめて、その生活指導の一面であるのですが、とに角日記を綴つて行く上にはこのことが、より深く、より廣く意義をなして行くのです。その他、日記には一日の行動の凡てを記錄して行くわけには行きませんので、適當にその行動を取捨選擇しなければなりませんので取材の方法の會得にもなるのです。その他數へあげて行けばまだいくらもあると思はれますが、最後に最も重要なことを述べませう。それは、

5　兒童を知ることが出來る

といふことです。教育はどこまでも具體的な兒童を知つて始めて、有意義に導くことが出來るものです。その意味に於いて兒童の日記を讀むことによつて、より內面的に、その心理もその行動も知ることが深くなつて、眞に具體的の兒童に即しての教育が出來るのであります。

第三十八問　日記を毎日書かせるにはどうしたらよいでせうか

お互私達大人でさへも、新しい年の始めなど「今年こそは」と發心して書き出した日記が、何時の間にか、とぎれ〳〵になり、終には中絶してしまつたといふ經驗を幾回も持つものです　まして子供にとつて、毎日の平凡な生活を一年間とぎれずに書通すといふことは、並大抵の苦勞ではありません。

そこで毎日續けて日記を書かせる爲には、

第一に、教師が毎日(又は數日置きに)親切な點檢をしてやることです。

日記は生活の記錄であるから誰にも見せるべきものではないといふ樣な考へ方は、子供の生活指導を目的とするこの場合には誤つたことゝ云はねばなりません。寧ろ子供は、その信賴する先生にこそ自分の日記を見て頂けることを最も大きな喜びとするのです。

「先生に日記を見て頂ける日は嬉しい」とか、

「日記を返していたゞいた時、先生が何を書いて置いて下さつたか、讀むのが一番嬉しい」

等といふのは、子供の僞らない告白であります。唯、こゝで大切なことは、日記を檢閲する教師の態度(心構へ)ですが、それは單に誤字の訂正や、表現形態への惡口を並べるのみでなく、(寧ろそんなことは、この場合殆んど何の意義も持たないのであつて)日記に綴られた子供の生活態度への愛情に滿ちた指導といふことを根柢とせねばなりません。親切な相談、愛に滿ちた批判と激勵といふ樣な言葉をたとへ數行でもよいから書添へてやることが、子供達にとつてはどれ程の喜びであるかわかりません。そして、この喜びの故に子供は毎日續けて書く勇氣をも奮ひ起すことが出來るのであります。

第二に、意識的な生活態度を馴致することです。

一般の綴方を書かせる場合にも、綴る以前の指導が大切であると同樣、こゝでも、日々の生活を意識的に過させることが必要であります。「今日は書くことがない」といふ樣な日は事實上一日としてある筈はないのですが、子供はよくかうした事を訴へるものです。これは意識的な生活態度が確立してゐないことを意味するものだと言へるでせう。小さなことにも心をとめて生活する——「見る」のではなく「見つめる」といつた生活態度を日頃から馴致して行けば、こ

んな悲劇は起らずに濟みます。そして反つて記錄する材料が多過ぎて其の選擇に困る位にまでなります。從つて毎日繼續して書く上に、材料的な苦痛がなくなり、比較的に樂に書けるやうになるものです。

第三に、記述形態への工夫によつて、子供の倦怠を除くことです。

來る日も來る日も單調な形式を追つて、一本調子に書かせて居れば、倦怠が生じて續かない原因となる場合があります。時々、記述の形態を工夫させ變化させることによつて（それも段々發展的に）絶えず新しい生氣を與へることを忘れてはなりません。

以上、意欲的、題材的、表現的の三方面から「毎日書かせること」への根本的な指導態度を上げましたが、日記がその本質上、子供の生活の直接的な指導を目的とするものであるといふことゝ、教師と子供の心を繋ぐ大切な綱であるといふ事を考へ併せます時、結局は教師の指導熱意の如何によつて、どんなにでもなるものであるといふ事を銘記すべきでありませう。

第三十九問　日記にほんたうの事を書かせるにはどうすればよいでせうか

子供の日記は、どこまでも子供自身の生活の眞實な報告でなければなりません。子供の日記が虚僞の生活報告であり。自己裝飾の爲の材料であるならば、それは何の價値も持たないのみか、反つて害毒を流すことにさへなるのです。そこで「ほんたうの事を書かせる」といふことが、日記指導上の一つの大きな主眼點となつて來るわけです。

ところで、どうすれば子供はその日記の中に眞實を書き綴つてくれるでせうか。

先づ第一に、教師自身が子供に信頼され愛される存在となることです。かう云ふと「子供に信頼されない教師があるだらうか」といふ逆な不思議さが生れて來ますが、事實は可成りあるのではないのでせうか。この先生になら、自分の生活の總てを訴へ、喜びも悲しみも共にして頂けるといふ子供心が培はれてくると安心してその日記にほんたうを書いてくれる樣になるものです。「日記には本當のことを書くのです。」と幾ら繰返しても、子供はそれを知らずに虚言を書いて居るわけではありませんから、この根本を培ふことを忘れては何にもなりません。子供の日記の中に虚僞の生活報告を見出したとき、その責任をとがめて叱る事しか知らないと云つた樣な教師の下に、どうして眞實を語る子供心が育てられませうか。愛のないところ、教育の

眞實が培はれた例がないのですから、日記の指導に當つても、私達は子供を愛し、その中に子供の綴る心を育て、眞實を語る喜びを感得させる事に努めねばなりません。

第二に、子供の祕密は、祕密として尊重してやることが大切です。子供にも、子供ながらの生活の祕密があり、感情の訴へがあるものです。それを無視して「誰々さんがこんな事を日記に書いてゐました」といつた調子にその内容を片端から暴露する態度をとつてはなりません。勿論、立派な生活事實の公開は教育上からも、その子供個人的な立場から考へてよいわけですが、子供の日記を材料に全體の子供への公開をなす時は餘程細心の注意を忘れてはならないのです。子供は、自分の信頼する先生であるが故に、總てを赤裸々に物語るわけですから、その子供心をどこまでも尊重してやることが、教師の側として忘れてならない心構へとなるわけです。

第四十問　日記の指導は學年的にどう發展して指導すればよいでせうか

低學年（一二年）

日記の基礎的な指導といつたところに根柢を置きます。

最も初歩的な形をしては「繪日記」があります。一日の生活事實の中で最も印象に殘るものを繪畫によつて表現させるのです。これは文字習得以前に於いても可能です。だん〳〵進むとその繪畫の中に文字的説明、文章的説明を記入させて行くことによつて、次第に完全な日記形態に近づきます。

多分に發表意欲を持つ子供達ですから、どこまでも興味中心的な表現形態をとらせることによつて、その意欲を培ひつゝ「繼續して書く」「うまく書くことよりも本當のことを書く」といふ態度を培ふべく努力することが大切です。しかも、自己中心的な物の觀方、考へ方をする此の期の子供達には、どこまでも自分の生活行動に即して記錄して行く態度をつけねばなりません。分量的に多くを求め、形態的に眞の正しさを求めることなどは、嚴に避けねばならないのです。

中學年（三四年）

生活事實の報告記錄といつたところに指導の根柢を置きます。

(イ)表現形態の指導

形式的には日附、天候、温度などの書き方

内容的には、一日の生活の上で特にかはつた出來事を中心に、その時の有様や強く感じたことを、そのまゝに書く。

(ロ)特殊日記の指導

貯蓄强調週間、銃後奉公强化週間、國民精神總動員週間等、特に國家的鄕土的な生活目標を掲げて話す週間には、特殊な行事が多く、さうしたものを中心とする週間日記の指導も大切です。

更に自然觀察や理科と關聯した「繼續觀察日記」の指導も、この頃の子供にとつて、その科學的な生活態度を馴致する上から見逃すことの出來ないものです。

中學年は、何と云つても綴る力の進展時代でありますから、日記に於ける表現上内容上の制約を餘り嚴密にすることなく、どん〳〵書かせることによつて、その綴る意欲を育てることが大切です。この意欲を育てることによつて「繼續して書く」態度が確立されるのであります。

高學年(五年以上)

生活事實の内省的自覺的方面の記錄に指導の根柢を置き、單に生活事實の報告といつたところに留まらないで、「心の修養の爲に」といふ域にまで高めることを考へます。

一日の生活事實の中、印象的なものを主題として、その事實に對する生活感情の批判、内省自覺等を綴らせて行く時、それは子供自身の日常生活の伴侶として大切な使命を果して行くことゝなるのであります。

特殊日記指導の形態も、こゝではもつと高められた姿として考へられます。週間日記は、國家的社會的行事への積極的な生活參加の記錄となりませうし、觀察日記は科學的な製作場の指場過程や動植物飼育生産活動の日記などゝして、より精密な科學的生活態度の伺へる記錄として發展するわけです。

更に俳句日記、詩日記などの特殊な表現形式を中心とする日記の指導も高學年の子供には可能なわけです。

これを要論しますと、初等低學年に於いては所謂その初歩的な指導で言語や繪による日記で

あり、中學年に及んで生活の具體をよりくはしく、しかも多方面に亘つて日記するやうにしつけ、それが高學年に於いては、所謂高學年らしい生活態度のもとに、一つの生活事象にも深い意義を見出して、生活の意義を感じさせるやうな日記を書かせることに重點をおいて指導すべきであります。

第四十一問　手紙文の指導は何年から始めたらよいでせうか

手紙文は日常生活の上に於いて直ちにそれを書く必要に迫られた場合に必要なわけであり、その場合は、一年生から始めるべきであると言へませう。親類の家へ遊びに行つて來た禮狀を書き、お祭に人を招くなど、一二年生の子供にも、その實際生活の上に必要な場合が起つて來ますし、一年の子供がその拙い文字で書き綴つた慰問文が前線勇士を喜ばせる材料となる場合の多い事實等を考へます時、「手紙文の指導は一年から必要である」といふ事がはつきり言へるだらうと思ひます。

讀み方では、二年生に「いうびん」といふ教材が始めて提示されてあつて、葉書や手紙を交換する遊戯生活が表現されてありますが、綴方としては、これと聯關して手紙文を書く基礎的根本的な態度をつける指導をすることが大切であります。それ以前の必要の上に立つ初歩的な手紙文の指導と相まつて、このあたりまでに手紙文指導の發展基礎を培はねばなりません。

第四十二問　候文は書かせる必要がありますか

かつて、子供の綴方に實用的價値を重視した時代、候文の指導なども可成り時間をさいて、指導されたものであります。これは文藝至上主義の綴方と對比して、「學校を卒業しても、手紙一本ロクに書けないのではどうならう」といふ實用主義の綴方教育思潮が生んだ指導形態の現れと云ふべきでせう。

ところで、國民學校の綴方は「兒童ノ生活ヲ中心トシテ……」といふ根本的指導態度が明示されてあるのですから、どこまでも子供の生活に即し、子供の生活を高める爲のものであらねばなりません。そこで候文が今日の子供の生活に即したものであるかどうかを考へます時、かうした特殊な表現形式がその生活と殆んど交渉を持たないと言へるでせう。「卒業して諸官

廳に務めれば、その公文書は總て候文なのだから、矢張り指導する必要がある。」といふことも一方に於いて考へられないでもありませんが、さうした大人になつてからの生活への準備のみを主眼とする候文の指導は、決して今日の子供の生活を高めるものとはなり得ません。しかも、公文書の如きは、候文といつても簡單な一定の形式を持つものでありますから、その必要の場に立てば殆んど苦痛なく慣れ得られるものであります。

かうした意味に於いて、候文を書かせる指導などは、先づ不必要だと言へます。候文が讀解出來る位の程度に慣れさせて置けば十分でせう。高等二年の卒業期前、履歴書の指導等に併せて、簡單な形式を教へる程度でよいのであります。

第四十三問　手紙文を指導する上にはどんな注意が要りますか

かつての實用主義綴方萬能時代のやうに、兒童の生活とは全く無關係に、唯大人になつてからの生活準備の爲の手紙文指導であつたり、普通文と全然隔離された形に於いて指導されるものであつてはなりません。手紙文も綴方教育の一部面でありますから、あくまで兒童の生活に即して指導することを根柢とし、その生活を高めさせることを考へねばならないのであります。これは手紙文指導上の大切な心構へと言ふべきでせう。

さて、實際指導上、どんな注意が必要であるかと云ふことを掲げてみませう。

1　機會をとらへること、（記述前）

手紙は、書くべき必要に迫られて書くことを本位としますから、その機會は學級兒童全體といふよりは、個々人によつて異る場合が多いのであります。手紙文の獨自性とか特質とかいふものは、單に手紙文の形式を教へるだけでは究明出來るものではありません。從つて、學級全體の兒童を對象とする手紙文の指導は、書くべき必要に迫られた機會を捉へることが先づ大切であります。たとへば、轉校して行つた級友への手紙とか、長期に亙る病缺してゐる友達への手紙とか、前線勇士への慰問文とか、お祭などに親類の人を招く爲の手紙とか、誰もが書き得る適當な機會をとらへて一齊に指導すべきであります。

2　用語、內容、形式等についての指導をすること、（記述時）

いよ〳〵書かせる事になれば、先づ手紙の特質を知らせることが必要であります。即ち手紙

は受取る人が最初からわかつてゐるわけでありますから、絶えずその人を念頭に置いて記述しこの手紙によつて何の用を足すかと云ふ記述の目的をはつきりさせることが大切であります。

次に、手紙の一般形式でありますが、挨拶の書き方、日附、名前、宛名などの書き方、便箋（卷紙）の使用法、封筒の書き方等に就いても叮寧に指導しなければなりません。

更に、用語の問題でありますが、特に禮儀を守るといふ謙虛な態度によつて敬語の使用から正確な文字の書き方にまで發展して指導することが必要であります。對者との身分的關係などを考慮して、敬語使用の程度に就いては特に細心の留意を怠つてはなりません。

3　書簡生活の態度を指導すること、（記述後）

出來上つた手紙は必ず讀返す習慣を養ひます。正しいと思つて書いても思はぬ誤りを生じてゐる場合が往々ありますから、それでは用件を足せないのみではなく、對者の感情を害して思はぬ不幸に陷ることさへ起ることになります。

それから、切手のはり方、目方と料金の關係等に就いても一通りの知識を與へ、更に、返信の必要な場合はなるべく早く、好意を持つて認めるといふ樣な書簡生活の指導にまで發展することが望ましいのであります。

第四十四問　慰問文はどんなのがよいでせうか

慰問文は、兵隊さんを慰め、兵隊さんに喜んでいたゞく爲に書くものであります。從つて本當に兵隊さんに喜んでいたゞけるものが一番よいわけです。兵隊さんを心配させ、悲しませ、淋しがらせるやうなものであれば、慰問文としての使命を果し得ないのみか、反つて害毒を及ぼしたことになるわけです。

そこで、兵隊さん達は、どんな慰問文を本當に心から喜ばれるでせうか。最近、歸還勇士の口から聞いた調査を綜合して次に掲げませう。

1　眞心のこもつたもの

先生から書けと言はれたから書いたといふお座なりの慰問文ではなく、兵隊さんの御苦勞に感謝して、何とかして兵隊さんをお慰めし、激勵して上げたいといふ眞心の讀めるものでなくてはなりません。驛頭で日の丸を手にして歡送する時の熱誠そのまゝの感激の中から生み出さ

れたやうなものがよいのであつて、類型化された申しわけ的なものは、前線勇士に反つて失望を與へるやうなことにさへなります。感謝の眞心こそは、慰問文の生命であると言ふべきでせう。

2　子供らしいもの

子供の書いたものは、どこまでも子供らしいものでなくてはなりません。戰地の兵隊さんに送るのだからといつて、ことさらに大人の手が入つたものや、六ケ敷いきまり文句「聖戰貫徹」「東洋平和」「職域奉公」「大政翼賛」等をだら〳〵並べた抽象的な感謝文では、子供の生氣を失つてしまふわけであります。子供がその生活を通して生み出して來た慰問文は、もつと無邪氣で、もつと微笑ましく、本當に子供らしいものであるべき筈です。

3　鄕土の樣子をくはしく書いたもの

留守宅の樣子、近所の出來ごと、村や町の變つたこと、學校の有樣等、鄕土の移り變りを細かに知らせることが大切であります。或る兵隊さんが「私達を慰めてくれる總ての母胎は鄕土の匂です」と言はれましたが、戰場の夢にも見られる故鄕の樣子が、かはい〻子供の筆に乘つて渡つて來た時、兵隊さん達はどれ程喜ばれることでせう。鄕土風景を畫いた繪や、鄕土の木の葉、草花などの「おしば」等を同封すれば、更に喜ばれること〻もなるのであります。

4　銃後生活の活動狀態を書いたもの

鄕土の樣子の一つになるわけでありますが、特に子供達の武運長久祈願の樣子や、勤勞作業諸種の鍛錬、銃後生活の覺悟などは、兵隊さん達に「たのもしい」といふ喜悅と安堵を與へることゝなります。兵隊さん達の後を繼ぐ男々しい覺悟が、さうした實際の生活々動の中に盛られて來てこそ、本當に價値の高いものとなるのであります。

5　戰地の樣子をよく理解して書いたもの

受取られる兵隊さんの活動して居られる戰地の氣候・風土等をよく理解して書いたものである事も大切です。寒い土地の兵隊さんに暑さ見舞が行つたのではお話になりません。かうしたところまで細かい注意の拂はれた慰問文がよいのです。

第四十五問　慰問文指導上の留意點をお知らせ下さい

1　記述前の指導と留意點

イ　對者を定めること

何かなしに兵隊さんへ慰問文を書くといふだけでは、對者が漠然とし過ぎて記述を類型化してしまふ恐れがありますから、必ず具體的な對者を選ばせる必要があります。學級兒童の父兄とか、近隣の人、肉親親戚、鄉土出身の兵隊さん等の中から適當に相手を選んで、此の慰問文を受取つて下さるのは誰かといふ意識を絶えず念頭に於いて書くやうにしなければなりません

ロ　兵隊さんへの感謝の念を深めること

記述前に、前線勇士の美談や御苦勞の樣子を話して聞かせ、少しでも御慰問したいといふ感謝の念を深めて置くことが必要であります。それが慰問文に知らず知らず、眞心を盛つてくる大切なことゝなるのであります。

ハ　現地の樣子の概略を把へさせて置くこと

對者を定めると慰問文を受取る兵隊さんの活躍される土地が分るわけですから、記述前にさうした現地の氣候とか風土とかについての概略をとらへさせて置く事が大切であります。慰問文の時にだけ考へる問題ではなく、寧ろ戰地の樣子を銃後の子供までが理解してゐることは、國民としての務めでさへあります。

2　記述の指導と留意點

イ　內容方面

○家の樣子、隣近所の樣子、村や町の樣子、學校の樣子、天候や田畑の出來具合など、鄉土の移り變りを具體的に書く。

○戰果の樣子や外交の問題、銃後國民生活の緊張振り、戰捷祝賀會の情景等、銃後國民としての張切つた生活姿態を書く。

○故國と戰線を結ぶといふ心持で、最近の生活報告を素直に書く。

○戰線よりの便りや繪葉書を手にした時、新聞などで忠勇美談を讀んだ時などの感想を書く。

ロ　形式方面

○用箋に讀み易い文章で叮寧な文字で書く。（綴方のノートや原稿用紙ではいけません）

○敬語の使用には特に留意させ、兵隊さんを友達扱ひにした樣な言葉は絶對に使はせないやう

に。

○年月日、住所氏名などは明瞭に。

○類型的なきまり文句を並べるのではなく、生活實感をなるだけ具體的に書く。

○繪を挿入させ、草花や木の葉の「おしば」などを入れることも工夫する。

○無理に手紙の形式をとらせなくても、普通の綴方の形式であつてもよい。

3　記述後の指導と留意點

イ　檢閲すること

記述が終ると必ず檢閲することが大切であります。反戰思想や、ことさらに銃後生活の苦しみ等を記述してゐないか、兵隊さんへの禮儀を缺いた言葉使ひはないか、類型的なお座なりになつてゐないか等といふ事を中心に檢閲すればよいのです。

ロ　慰問文の回數をなるだけ多くすること

返事が來なければ慰問文を出さないといふ樣な功利的な考へではなく、一回でも多く出すやうに指導しなければなりません。又兵隊さんからお禮のお返事が來たら、必ずその返事のお禮を書かせることが大切です。

第四十六問　實用文とはどんなものですか

手紙文とか、祝辭文とか、送別文とか、弔慰文とか、履歴書とか、形式化された日記とかいふ樣な、大人となつてからの實際生活に直接的な關係を持つ文のことを總稱して實用文と呼んでよいでせう。

これは「國民學校を卒業しても手紙一本書けないのでは困る」といふ、綴方の實用的價値の强調から生まれ出た形態であることは言ふまでもありません。國民學校綴方の一部として、かうした直接的な實用價値を重視したものも勿論必要ではありますが、かつての實用主義的な綴方思潮のやうに、これのみにたてこもることの愚かさは云ふまでもありません。

第四十七問　生活文とはどんなものですか

子供の生活經驗を綴つた文を生活文と呼んでゐます。

子供の生活は廣範圍であつて、遊んだこと、お手傳をしたこと、勉强したこと、喧嘩したこと、旅行に行つたことなど種々あるわけですし、ともかく子供の今の生活を土臺として綴られるものを指してゐます。實用文が主として大人の生活に入る準備工作としての價値を强調してゐるのに對して、生活文は子供自身の今日に於ける生活建設のためのものとして考へられてゐるわけであります。

最近盛んに唱へられてゐる「生活の綴方」は、この生活文を綴らせることによつて、子供自身に自分の生活を反省させ、自分の生活を再認識させ、自分の生活を再組織させようと企圖したのであります。

第四十八問　童詩の指導はどんな價値を持つものでせうか

かつて大人の藝術的鑑賞の對象として眺められ、時には文學教師の慰安玩具とまでなり下つた兒童詩が、最近では子供自身の生活の光であり、子供自身の生活の再認識と新しい組織の爲のものであるといふ所まで、その價値觀が高められて來たやうであります。

「兒童詩教育は、よりよき皇國民たらんとする子供自身の强靱な生活力を錬成する爲の教育であり、人間性そのものゝ錬成教育である。」

といつた目的觀も、この新しく見直された價値觀念の上に生み出されて來たものと言はねばなりません。

そこで、童詩指導の價値は、かうした目的を達成し得るところに其の根柢を持つものであること事は勿論でありますが、更に著しいものゝ幾つかを上げてみませう。

1　事象の觀方、考へ方を適正に指導することが出來る。

詩は、子供の赤裸々な生活感情の表現であります。總ての感性とか感覺とかを生のまゝの姿に於いて表現してゐるのであります。從つて、その中には子供の人間性が躍如として現れて來てゐる筈であります。生活事象の見方考へ方が、最も端的な形によつて窺はれる筈であります。そこで、その赤裸々な子供の生活感情・生活姿態を凝視することによつて、漸次それを適正に導き、子供自身に自分の生活を再認識させ、自分の生活を新しく組織させることが可能となるのであります。即ち、國民學校の綴方に求められる「事象の見方、考へ方を適正に指導する」

ことが出來るのであります。

2　感覺の錬磨、觀照力の養成を企圖することが出來る。

詩は、感覺による純粹な對象の把握であり、その表現であります。從つて、詩作することそれ自身が感覺を錬磨する一つの操作となり、逆に感覺が錬磨されることによつて、詩作が向上するのであります。しかも、その感覺の正しい錬磨は、やがて緻密な生き方への觀照態度を培つて行く根柢をなすものであります。

3　表現手法の錬磨をはかることが出來る。

詩は純粹な言葉の創造であると言へます。國民學校綴方の目的の一つとして

「平明ニ表現スルノ能ヲ得シムルト共ニ創造力ヲ養フコト」

が上げられてゐますが、國語表現に即した創造力の培養に、常に創造的に言葉を驅使する詩の指導が大切な役割を持つと言はねばなりません。しかも兒童詩に於ける言葉が、その生活の中から生み出されて來る平明なものであり、心と言葉の一致を絶えず考へてゐるものであることを思ふ時、一語一句もゆるがせに出來ない表現手法の錬磨が企圖されるのであります。

これを要するに詩の指導によつて子供の國民性を豊かに育て、感情なり感覺なりを豊富纖細に培ひ、如何に物を見るか、如何に物を考へるか、そして如何に物に感じるかといふ性格を作つてやることが出來ると言へませう。

第四十九問　童詩の入門指導はどうすればよいでせうか

學年の如何を問はず、始めて童詩の指導をやらねばならぬ學級に時々出會ひます。さうした時、直ちに一般の學年的指導段階による其の學年相應の指導に入ることは困難であり、不可能であつて、どうしても入門指導から始めねばなりません。そこで、そんな場合の入門指導をどうすればよいかといふことをお答へしませう。

1　寫生詩からの入門

一番入り易い方法は、景色を寫生させることによつて詩的感情を培ふことであります。郊外に出て自然の中を拔渉させ、驚異的感動的な物の觀方、とらへ方の態度を養つて行きます。

○水たまり　初三男

雨あがりの道、
ところ〳〵に水たまりが出來てゐる。
自動車が通つたあと、
水の中に油がういて
地圖のやうになつてゐる。

○月　夜　初六女

きつい風が吹いて、
庭の木々が寒さうにふるへてゐる。
空に浮いた月が
銀の光を放す、
庭のとうらうのガラスが
小さく光つてゐる。

「詩は景色の寫生から始まる」といふことが、詩の入門指導に於ける定石のやうになつてゐます。そして景色の中に詩をとらへ、自然の中に詩を見出す態度がだん〳〵發展されて、總ての生活事象を詩的に觀ることが出來るやうになるのであります。

2　鑑賞詩からの入門

何の理窟なしに鑑賞詩をどん〳〵與へ、それによつて詩作の意欲と態度を培ひます。子供に詩論の説明をすることは絶對禁物です。子供はたくさん鑑賞詩を與へられることによつて、詩の形態とか要素とかいふものを自然に感得するやうになります。唯この場合の鑑賞は、詩作以前の工作としてなされるものでありますから、鑑賞詩は指導の方向を裏付けるやうなものを選んでくることを忘れてはなりません。

かうして、童詩に對する親しさを持たせることです。兒童の前で「詩」等と言あげをして抽象的な「詩論」をふりかぶらせると詩を作りたい心持はなくなつてしまひます。詩は感動の表れです。理窟ではありません。初歩的な指導に於いては、どこまでも先づ詩に親ませ、詩作する心を豊かに培ひ育てあげる態度でのぞまねばなりません。勿論、兒童が始めて作つた詩は、一

笑に附すやうなものが多いこともありませう。が、決してこれをなじらないことです。なじることよりも、先づみとめてやつてて「面白い見方だな」とか「これはいゝ詩だな」「こゝをこのやうに書いたらなあ」のやうに賞めたりひつぱり上げたりして導くことが大切です。

第五十問　童詩指導の學年的發展段階をお知らせ下さい

學年	目標	指導要項
一	言語表現の採集（詩作前の指導）	1教室や遊びの時間に於ける子供の詩語を採集する。 2詩語とは、子供の自然發生的な言語表現の中、驚異的な物の把へ方、新鮮な觸れ方をしたものを指す。 3詩語は板書やプリントによつて子供に與へると共に、これを生活畫化させたりして、綜合學習の資料とする。
	繪畫の說明記入	1生活を繪畫表現させ、それに說明を記入させる。 2說明は、「ボク」「ウシ」「ハナ」等の文字說明から入つて、漸次「いつ」「どこで」「誰と」「何を」といふ樣な文章說明に進ませる。 3感動的驚異的な表現に力を注いで指導する。
二	文字による言葉の寫生	1自分の言葉を文字で寫生させる。 2他人の言葉を文字で寫生させる。
	自巳中心の詩的表現	1行動のまゝ、見たまゝを短い綴方に書かせる。 2子供の心理を考へ、自巳中心的な物の把へ方を根柢として指導す。 3表現形式にとらはれず、興味を持たせる事を努める。行切りなどは嚴密に指導しなくてよい。
	寫生態度の指導	1自巳中心的な傾向がまだ濃厚であるから、一年の指導態度をそのまゝ押進めればよいが、漸次目を外にも向けさせる指導をする。 2何でも詩に書かせ、詩作の興味を覺えさせる。 3行動のまゝ、見たまゝに書かせ、本當を書く態度を馴致することに努める。（うまい言葉で書くことを要求しない） 4對象を驚異的發見的に把握する態度を益々深め、概念（頭）で詩を書くこと）を防止する。 5寫生態度を漸次深めて、特に或る部分を細かく見て書く態度（焦點把握）を指導する。 6心持・考へ・思ひ等は、行動や寫生に即して書かせる。

年		
家庭生活への取材指導	1家庭生活、特に父母兄弟姉妹のことや、家に飼育する動植物の取材等が増加するから、入念に指導する。 2その表現法は寫生的であるが、「肉親を思ふ詩」としての生活感情の深化をはかる。	

三	年
取材の選擇指導	1生活經驗が多方面になるから、その中で價値ある生活を知らせ、取材選擇の指導をする。 2肉親を思ふ詩、働きの詩、學習の詩等、取材指導の積極的工作をなす
客觀的な觀方の指導	1客觀的な觀方を育て、五官を錬磨することに留意する。 2自然や人事の事象を見自分の心に活現させて意味を發見する態度（觀照）を養ふ、寫生するものを通じて自分の姿が畫かれるやうな表現法をとる。 3行動を中心として總てを關聯づける表現法を根柢として指導する。
推敲の指導	1詩の形式についての一通りの指導をする。 2改行の推敲（讀む時の息の切目で改行されてゐるか） 3詩的感情がはつきり書けてゐるかの推敲。 4周圍の樣子が描寫されてゐるかの推敲。

四	年
現實性の培育	1空想的や浮薄な感傷を除いて、現實で觀、現實で考へたことの上に、正しい强靱な生活感情を培育する事の指導をする。 2積極的な取材指導に着手し、意識的に現實生活を通じて價値生活を取組み、これを詩作させることに努める。 3說明より描寫を奬勵し、矢張り行動中心の表現をとらせる。
自覺反省の態度養成	1全體の中に息吹く自分といふ事を漸次自覺して來るから、積極的に之が深化を圖る。 2自覺反省を國民的な自覺反省にまで高めるべく指導する。 3意欲的な對象把握の態度をつけるやうに努める。

五	年
生活認識の態度養成	1自覺反省を深めて、對象把握によつて自己生活行動を再認識させるやうに努める。 2詩材を擴張して、日常生活の何でもが詩に書け、それによつて生活建設が出來るやうな態度をつくる。 3特に、「學習と詩の聯關性」は、この學年あたりから實踐されることがよい。
國民的な觀方の養成	1國史の學習など、聯關して、事象を國家的な觀點から眺め、國民的思考感動の樣相把握に努めさせる。

高等科	年	六	年
	健全な生活感情の樹立	生活認識の深化	表現形式の指導
	六年の態度の延長と見てよい。特に詩の社會性を尊重培育することに努力する。 3 詩の中に盛られて來る社會性も、この方面に向かつて指導する。 見る基準を持たしめる。 2 生活感情を單に一個の自己感動としてゞはなく、常に國家的見地より	1 あらゆる生活認識の詩をこゝに歸一せしめ、感傷詩、概念詩、不健全な藝術詩を退け、體驗的に國民生活感情を樹立させることを指導する。 2 現實生活認識の深化は、やがて新しい生活組織への出發でなければならない。個人的な感情本位の詩から、意欲的全體的な生活認識の詩まで高める指導に努める。	1 五年の「生活認識の態度」を深め、對象を內面的に深くさらへる樣に導く。 2 積極的な自己生活を通じて、皇國民としての生き方を企圖せしめる。 1 詩の表現形式について、和歌俳句等と比較、善異を認識させる。 2 改行、句讀點等の正確な指導をする。 3 言葉の調子で書かず、中味(行動)で書かせる。 4 詩に於ける方言を極力取除くことに努める。

大體、右のやうな姿を根柢として發展して行けばよいのですが、童詩は中高學年になつても殆んど指導らしい指導を受けたことのない學級などが往々にしてあるものですから、そんな場合は、この一般的な指導段階に或る程度の手心を加へねばならない事は勿論であります。

第五十一問　短歌や俳句の指導はどの程度でよいのでせうか

短歌や俳句の指導は、かうした方面への特殊な興味を持つ教師の趣味性によつて指導されることが多かつたやうであります。從つて、大人の短歌や俳句の模倣再成といつた樣な作品が多く、しかも最も巧みに大人のものをまね得た作品を高く評價してゐるやうな傾向がありました。從つて俳句や短歌が持つ心持とか、眞の價値とかいふものを眺めることをしないで、徒らに言葉とか形式とかいふものゝみに閉じこもつてゐた嫌ひがあつたのです。

かうしたものも、國民學校綴方教育の一分野として考へられる以上、實際指導がそんなものであつてはならない事は言ふまでもありません。子供の生活を中心として、その上に短歌や俳句を作らせ、作らせることによつてこれ等に親しませ、生活を更に高めて行くといふ根本的な

態度をどこまでも失つてはならないのであります。

更に、子供に俳句や短歌を作らせることは、讀方教材に示された作品のまねごとをさせるのではないと言ふことをしつかり考へねばなりません。寧ろさうした作品をより深く味はふことの出來る心を育て、少しでもそんな作品の心持に近づけようとする爲であつて、決してその形態を模倣させるのではないのであります。どこまでも、名家の作品を少しでも深く味はふことの出來る心を育てる爲の指導を考へて作らせることが根本的な心構へであらねばなりません。

第四章　學年的指導段階に關する問題

第五十二問　綴方の初步的な指導はどうすればよいのでせうか

綴方の初步的な指導の一般的順序でありますが、これは主として初等科一年の兒童を對象とするものでありませうから、その積りで書くことにします。

1　生活の言語發表

文字收得以前の綴方作業として、先づ生活を話させることから始めます。したことをそのまゝに話させる。そして何でも先生の前でお話出來る子供、發表することを喜ぶ子供にすることを考へます。

2　生活の繪畫表現

一日の生活の中で最も印象的なものをとらへて繪畫表現をさせます。これも文字收得以前の

發表方法として大切なことであります。さうして、逆に其の繪畫を見て說明させる（繪畫表現した生活の言語發表）ことも考へて行きます。

3　繪畫表現に文字發表を加へる

言語發表の後これを繪畫化し、又、繪畫を見て言語發表させるといふ仕事に、漸次文字發表をも加へて行きます。文字の收得と相まつて、先づ繪畫の文字的說明をさせ、だん〳〵と文章的說明に導いて行くのです。

4　綜合的綴方指導

生活を土臺として、圖畫・話し方を始め、總てのものを綜合的に取扱ふことを考へ、綜合的綴方の指導を深めて行きます。

5　分科的綴方指導を漸次加へる

二學期の中頃にもなれば、綜合的綴方の中に漸次分科的綴方の指導を加へて行きます。この場合も、決して子供の心理を無視することなく、生活の事實をお話するやうに書かせることを考へ、綴る心をだん〳〵に育てゝ行くやうにしなければなりません。

大體、以上のやうな形で指導を深めて行くのがよいのであります。決して高次の要求をすることなく、發表を好む子供に育てることを主眼として、褒めることを指導の根本態度として、だん〳〵に押進めて行くといふ心構へを教師は忘れてはなりません。

第五十三問　言語發表の指導にはどんな心構が必要でせうか

言語發表の指導は、主として話し方の領域に屬するものではありますが、文字收得以前の最も初步的な綴方作業としても考へられます。

こゝでは生活の話し合ひと言ふ指導の形態を根本とすべきであります。そして、先生をこはがらないやうに、自分の生活や、その他の日常の些事もつとめて人の前で、先生の前で話すことが出來るやうな心を育てゝやることが大切であります。自由な、樂な氣持で話せるやう、溫情的、賞讃的に接することは、この指導段階に於ける教師の最も大切な態度であります。

話される內容や形式についても、實に種々雜多であり、方言や訛言も次から次へと飛び出して來ますが、その一々についてやかましく言ふことを避け、大局的な觀點に立つて一步一步と

正しい國語に進んで行く態度を忘れてはなりません。口形や發音の指導などに就いても、勿論これと同じやうなことが考へられるのであります。

更に、言語發表の機會は、教室で特設された時間のみではなく、あらゆる教科指導の時間その他遊放時間や放課後の自由な立場にある時にも考へて行かねばならず、寧ろさうした時の方が眞實味のある話し合ひがなされるのであつて、その間にだん〳〵と生活發表の指導を深めて行くことが出來るのであります。

第五十四問　繪による發表指導の價値を御教示下さい

繪による生活の發表は、話し方と共に文字收得以前の綴る基礎工作としての意味を持ちます。從つて繪畫そのものよりは、その生活內容とか、その繪による話し方とか、繪による生活の表現法などに主眼を置くものであつて、この點繪畫表現させることは過去の生活經驗の反省となるのであります。

更に、文字表現を收得した子供達にとつても、最初はなか〳〵思ふやうに文章を綴ることは出來ないものであります。從つて語る生活事實を持つて居ても、それを滿足出來るやうに文字表現することは此の期の子供にとつて可成り至難なことであり、その言ひ廻しの足らないところを繪に書くことによつて補はせることにもなります。

又、繪による生活發表の一般的な指導順序としては、生活を話させ、それを繪に描かせ、その繪を見て又話させるといふ操作をとるのでありますが、この場合、繪畫表現をさせることによつて、最初の言語發表で思ひ起せなかつた生活を思ひ出させることが出來るのであります。

尙、繪を描くことは、話すこと〻共に、この期の兒童の發生的な表現慾の現れであると言はねばなりません。文字表現以前の本能的な表現形態であるとさへ考へられます。從つて、描かせることは、此の心理的傾向に最も適した發表指導の一つであるといふ事も考へられるのです。

第五十五問　繪日記の書かせ方はどうすればよいのですか

繪日記は、生活の繪畫表現と文章的說明を繼續して書かせる指導形態の一つとして考へられ

るものであります。これによつて、繼續的な努力態度を培ひ、文章と繪畫の遊戯的具體化が計られ、全生活の統合が考へられて來るのであります。

そこで、繪日記はどんなに書かせればよいのか、或は繪日記指導上の留意點といつたやうなことを上げてみませう。

1　一日の生活の焦點を捉へて書かせる

先づ一日の生活を反省して、見たことや、したことの中から最も印象的なものを選び出し、それを焦點として書くことを考へさせます。低學年、特に一年の子供の綴方は「ボクハケサオキルト……」から始まつて、「……シテ、ソレカラネマシタ」まで、即ち一日の生活の總てに亘つて羅列的に書きつくさねば承知しない傾向がありますが、繪日記の指導では、その中に焦點をしつかり捉へさせることを考へねばなりません。

2　繪と文の一致を考へさせる

繪畫表現したことは、その一日の生活の焦點であるべき筈ですから、その文章的說明の焦點も又、繪畫表現の生活事實と一致して來なければなりません。

3　繪を先に書かせる方がよい

繪畫表現させることは、自分の生活を思ひ出させる操作として良い方法でありますから、先づ一日の生活の焦點を捉へると、それを繪畫表現させ、描いてゐる中に色々の事がらを思ひ起させて行き、文章說明をそれにつけ加へて行くやうに指導します。なれてくれば、かうした事は大した問題とはなりませんが、最初の間は「繪を先に文を後に」といふ態度で表現させる方がよいのであります。

4　繼續的な努力を絕えず賞讃しながら續けさせる

日記は繼續するところに價値を持つものでありますが、その「續ける」といふ仕事は子供には仲々の苦勞なのです。從つて絕えず賞讃しながら指導するといつた態度を忘れてはなりません。

第五十六問　紙芝居指導上の注意をお知らせ下さい

紙芝居といへば、町の辻に子供達を集めて演じてゐる街頭紙芝居を思ひ出されるかも知れま

せんが、こゝでは、さうした大人が子供のために作つたものを指すのではなく、子供に作らせる紙芝居指導上の注意をあげませう。

先づ紙芝居をつくることの操作過程を考へますと

1　脚本をつくること――綴方表現

2　脚本を繪畫化すること――繪畫表現

3　臺詞を考へてつくること――綴方表現

と言ふやうな三段階を經るものであり、從つて綴方と圖畫との聯關が當然考へられて來なければなりませんし、更にそれを實演させることを考へますと、

4　紙芝居を演ずること――話し方(言語表現)

5　一枚一枚のめくり方を考へること――發表態度

と言ふやうなことが工夫されねばなりません。從つて、こゝでは話し方や發表態度に至るまでの綜合的な指導がなされねばならない事となります。

さて紙芝居を作らせる方法でありますが、それに就いては次のやうなことが考へられます。

1　生活の紙芝居化

主として低學年の紙芝居指導として考へられるものであつて、自分の生活體驗を連續した文と繪によつて發表させることであります。主題となる生活體驗をどんな場面に構成して行くかといふことを工夫させ、低學年では大體數枚位のものとしてまとめ上げさせることを考へれば適當であります。

2　材料を與へて作らせる紙芝居

教材の紙芝居化はこの代表的なものですが、更に其の他の色々な小話などを與へて、それを紙芝居化させることも考へられます。教材の紙芝居化などは低學年などでも適當でありますが一般に材料を提供された場合は、純粹な脚本とか脚色などと言ふ比較的高次な創作となつてくるわけで、從つて高學年向きのものになります。更に、一つの主題だけを與へて自由に構成させることも、この中に含めて考へられます。

猶、指導の要點としては、

1　脚本・脚色の指導

2　出て來る人物の性格をはつきり出させる。

3　人の言葉(會話)を適切に入れさせること

4　枚數の少いものから漸次多いものに發展させて行くこと

5　なるべく鮮明な線畫(或は比較的線のはつきりしたもの)で描かせること

等が、その他に併せて考へられて來ます。

それから、作る時は常に實演を豫想して書かせ、從つて作つた紙芝居はなるだけ實演させることが教育的効果をより大きくすることになるのであります。

第五十七問　綴方の教授細目は必要でせうか

御承知のやうに、綴方には他教科目のやうに教科書がありません。唯、國民學校「よみかた」教師用の卷尾に、指導要項や參考文題が掲げられてゐるだけであります。これは、綴方が兒童の生活の上に築かれるものであり、兒童の生活は多分に地域性を持つてゐますから、全國劃一的に同じ文題によつて指導することは可成りの無理をともなふからであると考へられます。しかも教育といふ仕事は全く無計劃で進められるものでもなければ、又これ程危險なこともないのであります。從つて「よみかた」に示された指導要項や參考文題を基準として、その學校の地域性に立脚した教授細目を作製することは、勿論必要なことゝ云はねばなりません。

從來、綴方教授細目が不必要なものではなからうかとその價値を疑はれたこともありましたが、それは教授細目自身が多くは不完全なものであつたことゝそれを利用する教師が熱意を缺いてゐたことに原因するものであります。さうした原因を除去することを考へないで、直ちに不必要論を唱へることなど、全く軌道を逸したものと云ふべきでせう。教授細目は、船の羅針盤とも云ふべき役目を果してくれるものでありますから、各學校に於いて研究を進め、完全なものを作り上げることに努力しなければなりません。それが出來てこそ、一校の綴方指導の體系が正しくつくり上げられるのであります。

第五十八問　綴方教授細目を作る上の注意をお聞かせ下さい

從來、綴方のみではなく、總ての細目類が單に申譯的のものとなり、從つて職員室の一隅の

本棚に積んで置かれる備品に過ぎなかつた様な傾向がありました。これは一つには細目それ自身の使用價値を缺いてゐた爲であります。そこで綴方の教授細目をどう作ればこんな悲劇に終らないで濟むか、綴方教授細目作製上の注意を上げてみませう。

1　國民科國語の一分節としての精神を失はぬこと

綴方は國語の一分節であり、國語は國民科に屬するものであります。從つて其の綴方教育の指導基調となる細目には、國語の教育精神、國民科の教育精神といつたものが盛られ、しかも綴方獨自の教育的特色を持つたものとしなければなりません。御承知のやうに、綴方には色々の主義主張があつて、その各々に棹した細目がものされたことがありましたが、國民學校の綴り方は、最早そんなものに迷はされる必要のないまでに、はつきりした指標を持つてゐるわけでありますから、この根本的精神を失はぬやう先づ第一に心掛けることが必要であります。

2　參考文を掲載して具體的なものをつくること

類型的なもの、役に立たぬ言葉の羅列したものといふ様な形を一擲し、なるだけ具體的なものを作製することが大切です。その細目を活用すれば容易に授業が出來るといつた形態を整へるのです。參考文は他學校の綴方雜誌などから優秀文を選ぶと共にその學校、その地方の作品などを集錄することを忘れてはなりません。更に、特殊的な經驗を主にした文はなるだけ避け暗示性の多い一般的なものを選ぶことも併せて考へるべきであります。

3　地方的特色を加味すること

綴方に教科書のない理由の一つとして、兒童生活が地域的に可成り相異を持つ爲であるといふことが上げられるでせう。全國の兒童が劃一的な生活をするわけではなく、その地域によつて夫々特色を持つものでありますから、その地方的特色を現實の兒童生活の中に調査し、それを加味することは非常に大切なことであります。

4　學年の傾向を重んずること

兒童心理の發達程度、現實の兒童生活文にみる學年的傾向といつたものを根柢として、その傾向を助成することを考へ、しかも全校の各學年が系統的になつて來るやうに工夫せねばなりません。

5　綴方の全指導要項を包含すること

表現と生活とは一體をなすものであり、その各々の立場を固守することは勿論考へるべきではありません。更に取材の方向にしても一方に偏するやうなことを避け、綴方の全指導要項が系統的に包含されたものであることも必要です。

6　他教科との連絡を考へること

綴方が綴方のみの狹い中に閉ぢこもることなく、他教科と密接な連絡を保つことは當然必要なことであります。殊に國語の四分節は不則不離の關係にあるのですから、それ等との一體化を十分考へねばなりません。

7　加除訂正の出來る宏量と融通性を持たせること

細目の形式として最も大切なことは、加除訂正によつて朱筆を加へられる宏量と融通性を持たせて置くことです。教材の配當なども月本位ぐらゐにして、餘り嚴密な時間區劃をしない方が反つてよいのであります。實際問題としてその時間の通りに行くものではなく、却つてこれによつて融通性のないものとしてしまふ事になり易いのです。文例なども附加し、除去出來るやうにして置くことが大切であります。

第五十九問　教授細目の生かし方についてお知らせ下さい

1　教授細目は單なる備品ではない

從來教授細目の使用されなかつた原因の一つに、「これを使用しようとする教師の熱意が缺けてゐた」といふ事を併せて考へられるでせう。教授細目は單なる學校の備品ではありません。どこまでもこれを活用しようとする教師の熱意が大切であります。

2　時々訂正加除すること

作製された細目が絶對的に完璧であるといふことは考へられません。實際これを活用して居れば、種々不備の點を發見するものであります。從つて少くも年一回はそれ等の點について各學級での實踐事項を協議し加除訂正するやうにすればよいのです。又、毎年の兒童作品中から適切なものを參考文として選び、從來のものに追加するとか取りかへることが大切であります。

3　細目にとらはれ過ぎないこと

細目に準據した指導は大切でありますが、これにとらはれることは反つて實際の指導を窮屈なものにしてしまひます。そこで、細目に信を置いて尊重すると同時に、機に應じて適切な指導をも附加し、これをよりよく運營することを併せて考へねばなりません。

かうした事項が、これを運營する教師によつて實際に考へられるならば、細目は決して死んだものではなく、立派に生かされて來るのであります。要はこれを生かさうとする教師の熱意如何が根本的な問題となることを眞劍に考へて頂きたいと思ひます。

第六十問　低學年の兒童文の指標はどの程度でよいでせうか

低學年、即ち一二年の子供の文は、內容的に見て

生活の事實をありのまゝに綴ること

に指標を置いて指導すべきであります。未分化的な生活をし、主情的主觀的にしか物を見ず、しかも現實と空想との混淆された生活を送る此の期の子供達に、感想とか批判などゝ言ふ高次のものを要求することは、努めて避けなければなりません。どこまでも生活の事實、即ち自分で本當にやつた事を話し得る態度とその能力を得させ、これをありのまゝに書くことが出來るやうに導くべきであります。

表現態度としては、繪の話を文に、生活の話を文に、生活を文にするといふやうに發展して行つて、自分でしたことをした順に書いたり話したりさせることを目ざすことがよいのです。

ともかく高次の要求を避け、綴る喜びを感得させるやうに、誰もを綴方の好きな子供にならせるやうにといつた心構へで指導して行きます。

第六十一問　中學年の兒童文はどの程度に伸ばすべきでせうか

中學年、即ち三、四年の子供の文は、內容的に見て

それ〴〵の生活の眞實をくはしく書くこと

に指標を置いて指導すべきであります。低學年の未分化的生活から漸次分化的生活に移行しつゝある此の期の子供は、物の見方がだん〳〵發展して理知的、客觀的となり、現實感も可成りはつきりしたものとなつて、空想と現實の區別が漸次鮮明となつて來ます。それにともなつて

道德的な評價の態度も深まつて行くのであります。從つて、その生活が內容的に豐富になつて行くわけですから、先づ何でも生活の眞實を文にすることが出來るやうにしなければなりません。

表現態度としては文を長く、くはしく書くことに主眼を置きます。言語方面に於いてもこの期の子供は可成りの發達を遂げ語彙が豐かになつて來ますから、客觀的な物の見方の發達と平行して、生活事象をよりくはしく、より精細に叙べつくす態度を養ふべきであります。

要するに、中學年は綴方生活の伸展期でありますから、兒童文の美點を發見してこれを褒めその綴る心、綴る意欲を育てることに全力を注ぐことがよいのであります。

第六十二問　高學年の兒童文はどうあればよいのでせうか

高學年、即ち五年以上の子供の文は、內容的に見て生きかたのたのもしき文を書くことに指標を置いて指導すべきであります。中學年の分化的生活活動から統合的生活錬成期に入つたこの期の子供は、物の見方がだん〳〵精密の度を加へ、相當複雜なことや微細な點までも見落さないで把へ、しかもそれ〴〵の個性味をもち、內省的な生活態度を持つことが出來るやうになります。更に、生活意識の中に社會性が芽生え、團體的意識が發達して來るのも此の期であります。從つて、その生活がしつかりとした現實感を持ち、自分の生き方をその現實の上に立つて眞劍に考へるやうになります。そこで、かうした生活、かうした現實感を綴らせることによつて自分の生活を反省し、よりよき明日の生活を意欲的建設的ならしめるやうにしなければなりません。

表現態度としては、個人的な色彩と個性的な感情を育てつゝ文をつくることの意欲を持たせるやうにし、味のある文、簡潔な文、力のこもつた文等を制作する態度に向かはせ、そのためには、一語、一句もおろそかにしないやうにして、國語を尊重し愛護する精神態度を錬成することが大切であります。

これを要するに、この期の兒童文は、その生活とがつちり取組んで明日の生活のよりよき建設を企圖せしめることに重點を置くべきであります。

第六十三問　兒童の生活とその表現の學年的發達傾向を御教示下さい

1　初等科一年

生活態度

1　直覺的主觀的で極端な自己本位の時代である。

2　物の觀方、考へ方が外面的類型的である。

3　擬人的な物の觀方が強い。

4　興味は客觀的對象自體の價値性よりも、主觀自身の好惡によつて轉々と移動する。

5　經驗淺薄により獨斷多く、それだけに正直であり無邪氣であつて、大人の道德生活とは可成りの隔りがある。

6　狩獵本能、蒐集本能、爭鬪本能が發現し、男子にはその傾向が特に强い。

表現傾向

1　文が報告的羅列的であつて、模倣的色彩が濃厚である。

2　聯想に任せて筆を運ぶから、時間空間を無視したもの多く、時々記述が主題からそれる。

3　觀念の統一が困難であるから、纒つた一つの觀念を表現することが出來ない。

4　感覺に映じたものを反射的に表現する傾向が多い。

5　方言・訛言の亂用が多い。

6　言語・文字・語句・書寫力等が貧弱で、思想發表との間に相當の懸隔がある。

2　初等科二年

生活態度

1　一年の延長で、さして大きい變化はない。

2　心の動きは、主觀的主情的である。

3　對象を人格化して觀る事、即ち擬人的な物の觀方に興味を持つ。

4　狩獵本能、蒐集本能、爭鬪本能が活躍する。特に男子に著しい。

5　道德的な物の觀方は大人の模倣による事多く、空想と現實との混淆時代。

6　自己中心的な考へ方が未だ濃厚である。

表現傾向

1　概して羅列的であつて、聯想を追つて自己の經驗を叙述する事が多い。

2　斷片的な單文を結合して記述する爲、接續詞を多く用ひる。

3　方言、訛言の亂用、語の重複、主客の混淆等が多い。

4　片假名と平假名との混同が多い。

3　初等科三年

生活態度

1　物の觀方が稍々客觀的主知的な傾向を帶びて、一二年の頃とは可成り變化を來す。

2　論理的な考へ方、科學的な觀方が芽生えて來るが、知的破綻は未だ多い。

3　生活的經驗が此の變化によつて多方面になる。

4　道德的な見方は大人の模倣による場合が多い。

5　擬人的な觀方が圓熟する。

6　まだ空想と現實との混淆時代である。

表現傾向

1　長文を書くやうになる。

2　擬人的な物の觀方は所謂擬人文として圓熟する。

3　漸次敬體から常體に移る。

4　現實的な描寫法、寫生法が芽生えてくる。

5　經驗的叙述の筋は立つが、自分の感情をまだ十分に表すことが出來ない。

4　初等科四年

生活態度

1　物の觀方が客觀的主知的となる。

2　科學的論理的な觀方、考へ方が漸次發達する。

3　空想性が薄れ、現實性が濃厚となる。

4　思考判斷力が大に進歩す。

5　道德性が芽生え、共同生活に理解を持つやうになる。

6　無自覺より自覺への過渡期、渾一より分析への黎明期である。

表現傾向

1　筆が伸びて文が愈々長くなる。

2　現實的な描寫的、寫實的手法が可成り濃厚になる。

3　文に個性が漸次表れてくる。即ち自己を通して實感に觸れたものを把へて表現する。

4　正直に赤裸々に發表する。

5　初等科五年

生活態度

1　科學的な觀方、論理的な考へ方が大に發達する。

2　物の觀方が漸次內省を帶びてくる。

3　從つて主觀的主情的の色彩が再び濃厚となつてくる。

4　道德的な觀方が漸くはつきりしてくる。

5　共同生活に對する觀念が一層深まる。

表現傾向

1　美辭麗句にとらはれて綴方の態度が破壞され、表現に新味を求めようとして却つて筆が鈍り易い。

2　說明的文章が多くなる。

3　自分の內省、批判、意見等の開陳や、他人の善行への思慕を表現する傾向が生じてくる。

4　想の主客に應じ、表現に精略を考へるやうになる。

5　男女の性別が判然と表れる。

6　初等科六年

生活態度

1　物の觀方が一層內省的傾向を帶びて、自己生活認識の態度が深まる。

2　從つて主觀的主情的な色彩が非常に濃厚となる。これは中學年の客觀的主知的な觀方

の洗禮を受けたものである。

3　科學的な觀方、論理的な考へ方も、四・五年に引續いてうんと發展する。

4　道德性が一層進歩し、社會的な觀念が漸く發達する。

表現傾向

1　想の發展にともなつて筆が伸び、長い文の記述傾向が強くなる。その反面に、主情的に、短い言葉の中に味を見出さうとする傾向も出る。

2　文の修飾を考へすぎて、大人びた言葉を使ひ、反つて子供らしくない表現を誇るやうになる。

3　內省、批判、意見の開陳等の文が多い。

4　男兒は議論的に、女子は感情的に、その特性が現れて來始める。

7　高等科一年

生活態度

1　少年期から青年期への過渡期であるから男女の特性が顯著となる。

2　社會的國家的觀念が益々發達して來る。

3　科學的な觀方、論理的な考へ方は圓熟に近づく。

4　宗教生活のめざめがぼつ〳〵と表れてくる。

5　物の觀方は五六年の內省的傾向を經て、再び客觀的主知的傾向を帶びてくる。

表現傾向

1　學術的表現、說明的表現、評論的表現が進む。

2　男性にはかたい語句を使用した評論的な色彩の濃い理窟ばつた文が多く、女性には纖細な感情の細やかな文が多いが、ともするとだら〳〵した文になり易い。

3　形式美への腐心、虛飾の亂用、不熟な語句の混用等が多い。

4　纖細な心理描寫、精細な觀察描寫に長じてくる。

5　科學的論理的な正確さに藝術的な調ひのある文が出る。

8　高等科二年

生活態度

1　男女の特性が最も極端に表れる。
2　社會的國家的觀念が更に深まり、道德觀が顯著に進む。
3　科學的な觀方、論理的な考へ方が一段と深まつて、深みある意見を出すやうになる。
4　宗教的生活の色彩が漸次濃厚となる。
5　文學味が深化する。
6　物の觀方は更に客觀的主知的の動向が深くなつて行く。

表現傾向

1　男女の特性によつて生ずる文は高一と略々同じ。
2　道德的な觀方によつて生まれた文章が可成多い。
3　描寫がうまくなり、その味がよく表れてくる。
4　胸中にある總てを赤裸々に表現する事をためらふ。
5　形式美の腐心、虛飾や不熟な言葉を濫用する病弊は更に濃厚となる。
6　科學的な正確さと、藝術的な潤ひとを含有する文が現れる。

第六十四問　綴方の學年的指導の大綱を表示して下さい

	一年	二年
取材	自己中心の生活行動 親愛な人物、動物	自己中心の生活行動、色々の行事、價値的な生活經驗、親愛な人物、動物
表現形式	口頭表現（話し方）、繪畫挿入 叙事的な文、童詩（初步的入門指導） 手紙日記の初步指導	口頭表現の重視、繪畫挿入、童詩 叙事的な文、手紙日記の初步指導 口語の敬體
構想	大體どんなことを書くかきめる 生活經驗の順序に書く その時の事をよく思ひ出して皆書く 嚴格な構想指導をせずどん〳〵書かせる	自由にのび〳〵と表現させる 生活經驗を順序よく誰にも分る樣に書く 嚴格な構想指導を要しない
記述	片假名平假名の使用に慣れさせる 文字を正しく書かせ、句讀點・鈎の正しい使ひ方を指導する	句讀點・鈎・其の他の形式方面に慣れさせる ゆつくり落着いた態度で書かせる

	脫字を除く爲、微音で唱へながら書く 假名遣・方言は寛大に漸次矯正する	推敲	嚴格な推敲をせず、改作させる事もよい 自分の作品を讀返す態度をつける 誤字・脫字・句讀點・鈎・語法の誤り等、漸次推敲事項として指導する
鑑賞批評	よい文を出來るだけ多く讀んで聞かせる 常に文材のありかを知らせることに留意する 綴方の面白さを知らせ、綴る心を養ふ		
三年			
取材	價値的な生活經驗、自然觀察、社會的な出來事や、鄕土學校の行事、作業生活	表現	生活語でかく、敬體から常體にもうつる事に注意する 目次的な書き方(要項による書方)
四年			
取材	科學的な觀方研究、社會的な出來事 鄕土學校の行事、時局的生活經驗	表現	目次的な書き方指導、叙景的文、抒情的文、說明文、會話文、詩、日記、手紙等

	叙事的文、叙景的文、擬人文、會話文、詩、日記、手紙の本格的指導開始	構想	生活經驗をそのまゝ想ひ起して表現させる 經驗の順序に從ひ長文をつくらせる 中心點を定めて文を統一する初步指導 會話挿入により文の內容を具體化させる
記述			形式方面の徹底的訓練 段落　文題のつけ方について指導 記述中は創作三昧に入る樣仕向ける
推敲	必ず讀返し自已批正する訓練をつける 推敲の要點は脫字・誤字・語法の誤り 符號、常體敬體の混用　方言の亂用等		
	表現目的を意識させる 生活經驗の順序によつて表現させる 材料の取捨選擇指導(文の中心確立、精略等) 表現手法をれる(文の起結、全體と部分等　冗長から精練へ)		
記述	段落の切り方を指導する 思ふがまゝに作らせうんと想を伸す(筆寫力) 常體と敬體との區別 方言と標準語との區別 } を明瞭に意識させる 創作三昧境に入らせる		
推敲	自已推敲態度の確立 よみかへす習慣をつける 誤字・脫字・句讀點・鈎・語法　方言の批正 心持が表現されてゐるか否か		

鑑賞批評	他人の文をよく讀みとり聞きとる態度をつける よい文の味を知らせ、具體的に鑑賞批評させる 取材方面の開拓、表現態度の暗示に留意する	五年	他人の作品を讀解する力を發達させる 感想を述べる力を養ふ 綴方生活の各方面の暗示指導をし、生活觀照を深める
取材	繼續的な觀察、科學的な研究、自己の生活反省、社會的な出來事、時局的生活經驗	六年	繼續的な觀察、科學的な研究、鄕土の研究、時代的實用的なもの、自己生活の反省
表現形式	形式の充實、新味等、努力して綴方停滯期を脫す 抒情的文、說明文、評論文、叙事文、及び和歌、俳句、標語のやうな特殊形式、日記、手紙、詩等		表現法の多方體得、抒情的文、說明的文、評論文、叙事文及和歌、俳句、日記、手紙、童詩と凡ゆる方面の體得
構想	文の中心思想、選擇力を修練させる 材料の選擇、排列、言葉の選擇等、文の手法をねらす		自覺した計劃樹立を狙ふ 中心思想を基とし、創作の意圖をたてさせる 深い内面的凝視をさせ、對象の形を整へ中心

	精略、描寫、想の輕重、中心、取捨を知らす		點によつて統一させる 描寫の手法、言葉の選擇に留意するが、不自然な技巧はさける
記述	段落をつけて綴る指導 一般的な記述の約束に馴れさせる 創作三昧の境地に入らせる		文段を明確、組織的にかく指導 醇正な國語を十分驅使させてその心持を表現させる 圖表、地圖の挿入を工夫させる 記述の一般的約束になれさせる 創作三昧境に入らせる
推敲	推敲態度の確立 ○中心想を明確に表現する爲の工夫 ○形式方面の推敲、改作		推敲態度の自發的實踐
鑑賞批評	他人の作品を讀解する力を發達させる 作品鑑賞力を養ふ（内容と表現、味と深み、文の焦點、表現の多種樣相） 文の内面に入つて作者の生活内容についての批判態度を養ふ		生活の觀照深化創造をはかる 作品鑑賞力を養ふ

	高一	高二
取材	社會的國家的な諸問題、實用的職業的なもの 男兒は思索的、思惟的、女兒は叙景的抒情的なもの	社會的國家的な諸問題、實用的職業的なもの 宗教的なもの、年中行事の組織的研究
表現形式	表現法の多方體得、抒情的文、說明文、評論文、叙事文及和歌、俳句、標語、戲曲等の特殊形式 日記、手紙(實用的)生活認識の童詩	高等科一年に同じ、戲曲、隨筆の指導 感想文、評論文の完成 實用的文章の總括的指導
構想	初等科の構想力を磨く 素材を個性化して特色ある文をかゝせる 長篇、共同製作の指導をする	初等科の構想力を磨く、立體的構想 組織力をつける、長い構想
記述	樣式の特殊な工夫、一般的約束により、早く正しく書く指導をする 隨時　隨所で書ける樣仕向ける 創作三昧境に入り、全力を以て取りつく態度をつくる	文字、略圖等を早く書く 簡明に要領よく書く 繼續的執筆 創作三昧境に入らせる
推敲	推敲態度の自發的實踐 力作を殘す覺悟、赤裸々に書き得たかの內省には特に留意させる	自己訂正、自己添削の態度確立 文への責任を持たせる 心と言葉の融合をはかる爲、心ゆくまで推敲 苦心と努力の作たらしめたい
鑑賞批評	生活の觀照深化、反省、創造をはかる 作品觀賞力を養ふ 高度の文章觀、人生觀、社會觀樹立の出發指導 文學者の文も鑑賞させる	健全なる鑑賞眼の涵養 謙虛な態度による正しき批判 文學者の文も鑑賞する

第五章　綴る以前の指導に關する問題

第六十五問　綴る以前の指導とはどんなことですか

綴方は兒童生活の表現でありますから、綴方以前の生活體驗がその內容となつてくるのであります。從つて、綴る以前の生活が立派であれば、そこからは「よい文」を生み出すことが可能となり、つまらない生活があれば、つまらない文しか生まれ得ない筈であります。そこで、よい文を生ませる爲には、その母胎となる兒童生活の態勢を立派に整へることが必要となつて來るわけで綴る以前の指導の根本をなすものは、この綴方以前の生活指導であるといふことになります。

ところが、たゞ綴る以前の生活內容が如何に立派なものであつても、その生活の中に意味を見出す態度(觀照)がなく、それを文にしようとする子供の意欲が働かなければ、その生活內容は綴方となつては現れて來ません。綴る心、綴る意欲を育てる必要性がこゝに求められて來るのであります。

これを要するに、綴る以前の指導とは、その文材となる綴方以前の生活を健全に育てることと、その生活內容を如何に文章表現にまで導くかといふ子供自身の綴る意欲を培ふことを意味するものであると言ふことになります。

第六十六問　綴る以前にはどんな指導が必要ですか

綴る以前の指導は、綴方以前の生活指導と、それを文章表現にまで導く爲の意欲の啓培といふ二面的意味內容を持つものでありますから、その指導の方法についても此の二面に從つて考へることが必要です。

1　綴方以前の生活指導

これは、單に綴方の領域に於てのみ考へるべき問題ではなく、教育全體の仕事として考へられねばなりません。綴方によつて兒童の生活指導はなし得るものではありますけれども、兒童

の生活指導の總てが綴方によつてのみしかなし得られないといふことはない筈であります。かつての綴方教育がよい文を生ませるといふ當面の問題のみを考へ過ぎて、この根本を培ふことを忘れ勝であつた所に、一つの大きな缺點を持つてゐたと言へませう。かういふわけですからよい綴方がどん〳〵生み出される樣な學級は、其の學級のあらゆる教育姿態が健全であり、其の學級兒童のあらゆる生活姿態が立派であることを意味してゐる場合が多いのであります。

2　綴る意欲の指導

これは、各種の施設を通して綴る意欲を育て、綴方を意識しての生活行動をなさしめ、生活を文章表現にまで導くことを指導するのであります。そこで子供の綴る意欲、綴る心といふやうなものはどうして育てられるのでありませうか。主な事項を掲げてみませう。

イ　生活から

綴る以前の生活が立派であれば、子供はそれを發表しようとする意欲を持つものであります。これは私達大人の場合にも同じことであつて、寧ろ本能的な發現であるとさへ考へられます。まして生活體驗が綴ることを豫想してのものであつた場合などは尙更のことであります。そこで綴方を意識しての生活行動をなさしめる機會をなるだけ多く與へることは、綴る心を育てる大切な方法の一つであります。と同時にこれらの生活に意味を發見する態度（觀照）を培ふことも考へるべきであります。それは、どんなに立派な生活體驗であつても、觀照といふ作用が加はらなかつたら、題材的な生活とはならないからであります。

ロ　文話から

具體的な色々の文話を聞くことによつても、綴る心は育てられます。文話が持つ一つの大きな使命は、綴る心を育て、創作意欲を旺盛にすることなのですから。

ハ　他の文章から

綴る以前に於ける文の鑑賞指導は、兒童作品の方向づけをなすものであると同時に、新しい感激を與へることによつて綴る心を育てる方途となるものであります。

ニ　施設から

文詩集、文材帳、綴方暦、掲示板、作品發表會等、色々の施設を工夫して綴る環境を整へることも、綴る心を育てる大切な方法であります。

第六十七問　綴方をすきにさせるにはどうすればよいのでせうか

前項で述べました「綴る心」を育てることが先づ第一であります。綴方を嫌ふ子供の大部分は、「書く題がないから」と言ひます。生活體驗を持たない兒童は唯一人としてないのに、綴る題(文材)がないといふのは、結局「綴る心」の育てられてゐないことを意味するのであります。綴方を意識しての生活行動(意識的な生活態度)や、文話、鑑賞、施設等による綴る生活環境の整備によつて、綴る心を育てることは、「題を持たない子供」から「常に豐富な文材を用意する子供」へと導くことであり、從つて綴方を好きにさせることゝなるのであります。

1　親切な處理をする

どんな下手な文章であつても、その綴方を仕上げる爲に子供は可成の努力をしてゐるのでありますから、その處理をする教師の態度は最も愼重であらねばなりません。そこで文を讀む時は兒童の立場になつて讀んでやり、指導的な意味で評語を記し、しかも先づ賞めて育てることを考へるならば子供はあらゆる創作の苦しみをも忘れ、新しい喜びのもとに、更に一層の努力を惜しまないのであります。かうした教師の親切な處理によつて、綴りたいといふ意欲が助長され、綴方の好きな子供が出來て行くことになります。

2　綴方に理窟は禁物である

所謂綴方教師は、その文學的な識見や文章觀などを、むづかしい理窟で說明し過ぎるきらひがあります。かうした不用意な文話や指導態度は、

「綴方はむづかしいものである」

といふ氣持を、知らず〳〵の中に子供に植ゑつけてしまふことになるのでありまして、更にそれが

「あんなむづかしいものは、私には書けない」

といふことになり、

「綴方はむづかしいから嫌だ」

といふ所まで進んでしまふ場合が多いのであります。綴方にむづかしい理窟は禁物です。

「綴方はやさしいものであり、おもしろいものである」

といふ氣持を持たせることに努力することが大切であります。

第六十八問　文材帳の指導について御教示下さい

生活體驗の中に、題材的生活をとらへた場合（それは生活觀照の態度によつて得られるのですが）それ等のものを大切に記錄して置かせる爲に文材帳を持たせます。折角とらへたものでも、記述までに可成りの日があれば色々の材料を忘れてしまふことになり易いものですから、それを防ぐ爲に、記憶の新しい中に保存させるわけであります。かうすれば「書く題がない」といふ子供も少くなりますし、文材帳に書きつけたものは綴り度いといふ意欲も育てられて來ることになります。

文材帳は簡單な手帳のやうなもので十分です。その形式もなるだけ簡單にして、子供が思ひ切つてどん〳〵書ける樣にして置くことが大切であります。しかもポケットに入る樣な豆手帳ですと餘計に便利です。郊外指導の時などにも簡單に持出せますし、日常

月日	題	主なこと

の生活にも絶えず身につけてゐることが出來ます。

更に、文材帳の發展として、その中に綴方暦や生活暦などを掲げて置いてやることも考へられます。これは文材帳に記す題材的生活の把へ方に大きな暗示を與へてくれるからであります。

猶一層念を入れゝば、參考文例や文話を掲げて「綴方學習帳」といつた形式をとることも考へられます。

第六十九問　綴方生活暦はどんな意味を持つものですか

教師の側から考へますと、その月、その頃に子供がどんな生活をしてゐるかといふことを容易に知ることが出來ます。從つて課題をする場合などには大きな參考となりますし、これによつて指導の題材的な系統をも考へることが出來ます。

子供の側から考へてみましても、自分の生活の中から綴方の題材をとらへる場合に大きな暗示を受けることは言ふまでもありません。「題がない」子供を無くする爲の施設の一つとして大

切なものであります。

（生活暦の一例は、第三章第二十九問に掲げました）

第七十問　綴りたい心はすぐに文として表現することが出來ますか

綴る心が出來上れば、綴方を意識しての生活行動をなしますから、文となる材料は容易にとらへますし、從つて綴る題材は常に豊富に持つてゐることゝなります。けれど、それ等の生活行動や文材の總てが、そのまゝ文として表現されるわけではありません。その中から適切なものを取捨選擇する必要がありますし、如何に文を構成するかといふ工夫も必要となつて來ます。

取材の選擇は、その生活行動を如何に觀るかといふ兒童の價値判斷によるものであつて「道に照して心に移り行く情意」を選んでこさせることが大切であります。文の構成は、所謂「構想の指導」と言はれるものであつて、文材として選んだ生活經驗をどんな順序に記述するかといふ腹案を立てさせるのであります。

これを要するに、綴る心はそのまゝすぐに文として表現されるものではなく、取材の選擇と記述の構想を經て後に、始めて表現され得るものと考へるべきであります。

第七十一問　物の見方の指導とはどんなことですか

綴方は子供の生活の表現でありますから、その生活經驗の中で、見たり聞いたりしたことを書くのであります。こゝでは五官（目、鼻、舌、耳、皮膚）の働きを自己の對象に投げうつて「觀たもの」を材料として捉へるわけであつて、この意味から、觀方の指導とは、その生活事實中に如何にその感覺の力によつて事象を把握するかといふことの指導であるといふことになります。そして深く、細かく、しかも鋭くといつた觀方の三要項も、この段階に於ける指導目標として求められるわけです。

けれども綴方教育に於ける觀方の指導は、單にかうした生活事實中の感覺錬磨を意味するのではなく、その內容的な働き、即ちそれらの感覺によつて捉へた材料を自分の心に如何に感得してゐるかの指導にまで高められねばなりません。もつと言ひかへるならば、捉へ得た生活事

象を實感的にどう眺めてゐるか(嬉しい、悲しい、くやしい、楽しい等)、道德的にどう價値判斷してゐるかと言ふことの指導であり、見たり聞いたりしたことに對する感じ方、考へ方の指導であると考へるべきであります。

文の價値は、その素材のみにあるのではなく、その素材に對する作者の觀方如何によるものであります。しかも、その觀方が皇國の子供としての立派な姿にまで高められることが必要なのは、言ふまでもありません。綴方に於ける觀方の指導が、その最も根本的な問題として重要視されるわけもこゝにあるのです。

第七十二問　構想の指導はどの程度にすべきでせうか

文に表現する生活經驗の種類によつて、構想の指導は二つに考へることが出來ます。

1　時間的な展開の順序に從つて書かせる

直接自分の體驗した生活事實、遠足や運動會や勤勞奉仕や神社參拜などゝ言ふ樣なものは、その生活體驗の時間的順序に從つて、忠實に文章として再現させることを考へればよいのであります。文の書出しや結び、文の山などゝいふ特別な勞作は、餘り强ひてはなりません。勿論高學年の兒童にはさうした構想の指導も必要ではありますが、これを餘り强調すると、技巧に陷つて兒童文を失つてしまふ場合が多いのであります。そこで、どこまでも素直にその生活經驗の時間的な順序に從つて書かせることを第一とせねばなりません。

2　目的に從つて書かせる

家のお父さん、家の猫といふ樣に生活經驗の時間的順序がはつきりしない種類の題材に對しては、家のお父さんはやさしいとか、家の猫はかはいゝとかいふ文表現の目的に從つて書かせることを考へるのが一番自然であります。お父さんや猫に對する色々な材料が蒐集されても、この種類の文では、結局時間的な經驗の順序がはつきりしないのでありますから、當然綜合的な叙述の形態をとつてくるのであつて、心に强く感じた事柄を文表現の目的として、その目的に從つて最も印象深いところから書かせればよいのであります。

第七十三問　綴る要項をあげて綴らせる必要がありますか

構想指導の重點は、その叙述の形態とか順序とかの工夫にあるのではなく、寧ろ文構成の材料をなるだけ多く蒐集させるところにあるのです。文材となる生活經驗を十分想起させ、その事柄に關係ある材料を多方面に亘つて集めさせることが大切であります。

そこで、この集まつた材料をどうするかと言ふことでありますが、これを頭の中で體系づけることは可成りむづかしい事である上に、記述の時間中總てに亘つて想起して居らねばならないと言ふことは、なか〳〵困難なことであります。從つて、文を書く順序が定まれば、その順序に從つて十分想起し、色々の材料を蒐集して、豫め書いて置くことがよいと言ふことになります。

綴る要項が多種の材料と共にあげられてあることは、記述に安心を與へてくれます。更にその要項に從つて、その材料を適當に取捨しながら記述させると、主題から外れるといふ樣な悲劇は起らないで濟むのであります。

第七十四問　記述させるまでの話し合はどの程度にすべきでせうか

豫め子供が準備して來た文題並びに具體的な材料を發表させます。高學年では可成りまとまつた發表も出來ますから多人數に亘ることは出來ませんが、低學年ではその發表が斷片的であり、大抵は短いものでありますから、なるだけ多人數の者に發表させるとよいのであります。これは、子供相互に取材方向の暗示を與へさせることにもなり、又、教師が個人的に色々の指示を與へてやる材料ともなるわけです。

教師は、これ等の發表事項を土臺として記述に對する注意を簡單に話してやります。取材の主目標だけをはつきりと指示してやればよいのであつて、この場合くど〳〵と說明や要求が過ぎると、綴る熱情を阻害し、反つて文を縮ませるもと〻なりますから、十分注意せねばなりません。

第七十五問　課題作と自由作とはどんな長短を持つてゐますか

課題作には、

1　取材の積極的な方向づけ

2　豫告による計劃的な生活實踐

等の長所があり、

自由作には、

1　のび〳〵と書き得る綴文力の養成(記述力の錬成)

2　個々人に即した生活指導

等の長所があります。

そして、これ等各々が持つ長所の反面には、又當然短所が見出されるわけです。そこで、どちらを主として指導するかといふことは簡單に言へない問題であつて、學級の傾向や指導の目標によつて適當に併用して行くことが大切であります。一般に言つて、低學年には自由作の割合を多く、高學年には課題作の割合を多くするのが普通でせう。

猶、實際指導に當つては、新課題主義と呼ばれる廣義の課題主義をとるのが一番よい樣ですたとへば「今度はお手傳の綴方を書きませう」と豫め課題します。此の場合「お手傳」といふ課題ではありますが、「どんなお手傳」とは規定されて居ないわけです。從つて、兒童は「お手傳」といふ範圍内で自由な生活をし、自由な取材をすることが出來ます。或る子供は「稻刈」を或る子供は「御飯たき」を、或る子供は「お使」をといふ樣に、個々人に適した生活が營まれそれが取材されて來ることゝなつて、しかも指導目標に向つての方向は失はれてゐないことになります。これは課題作と自由作を同時に併用した形の指導法であります。

第六章　記述から完成までの問題

第七十六問　記述の時間に於ける教師の態度はどうあるべきでせうか

記述の時間に教師が机間巡視をすることは、教室全體の綴る雰圍氣を亂すものであるから、教室の一隅に座して靜かにし、或は子供と共に創作することがよいと考へる人がありますが、やはりこの考へ方は消極的であります。靜かな創作の雰圍氣を亂さぬ樣留意しながら机間巡視し、子供の相談相手となることが一番適當でありませう。特に題が無くて困つてゐる者に諸種の暗示を與へ、構想に苦しんでゐる者、途中で筆が止つて進まない者等への個別的な指導はこの時間になすべき大切な仕事と言はねばなりません。

勿論、それかと言つて一時間中、教室を歩き廻つてゐる樣な態度は望ましいことでありませんから、時には机間を巡視して前に述べた樣な個別的な指導をしたり、又机について兒童の綴る樣態を靜かに凝視してゐることなど必要なこととなるのであります。

私は嘗て、記錄の一時間中のそれ〴〵の兒童の樣子を忠實に觀察し、これを記錄したことがありますが、單に綴るといふ仕事をする上にも、兒童それ〴〵によつて相當變つた外形的な相を示すのです。教室外の景色を見て想を錬るもの、原稿用紙の文字をみつめて考へるもの、それからじつと考へてゐて、鉛筆をもつたら一息に綴つて行くもの、他兒童の顏色ばかりに氣をとられてゐるもの、會心の笑をもらしながら書き綴つて行くもの、といふやうに實に千態萬樣であります。こんなのを見て、さて實際の作品とにらみ合はせて讀んでみると、兒童文を讀む場合の興味も亦一層强いものがあります。この樣なことを何度かしてゐる中には、大體文章のよさ、わるさは記述の時間に於ける兒童の態度からも讀みとることが出來さうです。

とに角、記述させる時の教師は、學級兒童の綴る心持を害しないやうに靜かな落ちついた教室の場を構成してやることが大切であります。

第七十七問　句點、讀點、改行の指導はどの程度に必要でせうか

句讀點を正しく打たせることは至難なことであつて、その完全は兒童の綴方には望み得るものではありません。けれど、文意を明らかにし、讀み易くする爲にも句讀點は是非必要なものなのですから、「文の終りには句點をつけ、言葉のつぎ目には讀點を打つ」といふ程度によつて指導することが大切であります。

改行は、文の段落を改める場合には是非必要なのですから豫め書く要項を定めて置いて、その箇所々々に於いて、改行することを指導します。これも決して樂な仕事ではありませんが段落による改行といふことも文意を明らかにする上に是非大切なことなのですから、かうした習慣を培ふことに力を入れねばなりません。

句讀點や改行の指導に當つては、子供に文法的な理窟を教へるよりも、右の様な簡單な目標のもとに習慣づけることが何より大切であります。

第七十八問　句讀點の大切なことをわからせるためのよい方法はないものでせうか

子供の綴方をみると、句點や讀點に對して、案外無頓着で文の始めから、終りまで句讀が一つもつけてないやうな文にも接することがあります。

しかし、句讀點をつけることは文表現の上から非常に大切なことでありますから、どうかして、これを實踐するやうに指導しなければなりません。

さて、これが大切なことをわからせるためには、先づ句讀的が絶對に必要なことを意識させねばなりません。

私は嘗て五年の女兒に對して、次のやうな文を讀ませて、句讀點の必要なことを感じさせました。

イ　二つに折りてくびにかける珠子

ロ　ここからはきものをぬいで行つて下さい

前の二つの文を讀ませました。子供達は非常な興味をもつて讀みましたが、イの文を「二つに折り、てくびにかける珠子」の如く讀むものと、「二つに折りて、くびにかける珠子」のやうに讀む者が出來て來ました。

尙、ロについても、

「ここからは、きものをぬいで行つて下さい」と讀むものと、
「ここから、はきものをぬいで行つて下さい」のやうに讀むものに分かれました。
この二つの場合から句點の打ち方で文の內容するものが、非常に變つて來るものであることを說き聞かせました。子供達は句點の大切なことを非常な興味をもつて知ることが出來ました。

尙、その他に國語讀方の指導と關聯してこれを知らせることが大切であります。

第七十九問　字の下手な兒童の綴方はどうしたらよいでせうか

これは「書方」と深い關聯のある問題であつて、單に綴方に於ける字が下手だから綴方の時間で指導するといふ態度だけでは駄目であります。字の練習は國語全體の仕事であり、更に他の教科目に於いても十分に留意して指導しなければならない問題なのであります。

そこで「讀方」の教材を適當な範圍內で書寫させる機會等には、一方に於いて其の教材の理解を深めることを考へながら、他方に於いて正確な文字、美しい文字の書寫力を養ふことに努め、更に他教科目に於ける學習帳の記入等にも「文字の書方」に就いての指導を重視し、あらゆる機會を通じて導くといふ態度をとらねばなりません。

綴方に於いては、推敲を終つた後で、丁寧に淨書させることも効果的であります。記述の最中は創作の興奮に醉ふて、一字一字の書寫ばかりを考へてゐることも出來難いわけでありますが、淨書の時はひたすら「文字を正しく美しく丁寧に書く」といふ氣持でゆつくり書かせることが出來ます。これを反復することによつて字のまづさも段々と救はれて來ませう。

尙、兒童の文字は、教師の板書その他の文字の影響を受けることが大切ですから、教師自身が常に正しく美しい文字を書くやうにしなければなりません。

第八十問　文を推敲する態度はどうしてつけるのですか

文を推敲する態度をつける最も基礎になる仕事は、記述後必ず讀みかへさせる訓練であります。一通り書き上げると、「自分の作品は責任持つて自分で直す」といふ氣持で何回も時間の許す限り讀み返させることが必要であります。さうして自分の文章がすら〳〵讀めるやうだつた

ら、先づその文は成功してゐると考へて間違ひないのであります。實際問題としては、記述の時間が足りなくて讀みかへす餘裕がなく、書き上げると直ちに提出するといふ樣な場合が多いのですが、敎師は必ず讀みかへした作品でなければ受納しないといふ態度を取るべきであります。從つて時間が無くて讀みかへせないやうな時は、遊放時又は放課後等を利用してでも「必ず讀みかへさせる」ことを訓練づけなければなりません。

時間があつても、子供はなか〳〵讀みかへさうとしないことがあります。こんな場合、友達の作品と交換して讀ませることも一策として考へられます。「どんなことを書いてゐるのだらう」といふ興味を持つて讀みますし、他人の書いた文ですからそれに對する先入意識も働かず從つて批正を要する箇所なども容易に見つけ出し、互に注意し合ふことも出來ます。勿論理想としては、自分の文は自分で責任持つて直させることが大切であることは言ふまでもありませんから、かうした「交換讀み」を本體として訓練づけることは出來るだけ避けねばなりません。

讀みかへす態度が出來てくると、形式的な批正や、簡單な推敲は一通り自分でやれるわけですが、唯これだけで推敲の態度が出來上つたと考へることは早計です。讀みかへして批正した作品を受納すると、敎師はその作品處理に當つて推敲を要する箇所を記入してやることが大切であります。この推敲箇所の記入は、豫め子供と約束した記號によることが一番効果的です。一々叮寧に誤字を正し、語法の誤りを訂正してやつても、それは子供自身の「ことばのおけいこ」とはならず、反つて非効果的な結果に終つてしまふことになります。從つて「×」が誤字「——」が語法の誤り、「〰〰」がもつとくはしく書くところといつた樣に記號で批正箇所を指示して返し、時々推敲の時間を指導過程中に特設して、それによつて自己批正させることを訓練づけるのであります。

更に學級全兒童による共同批正の指導によつて推敲の態度をつけることも必要です。かうした色々の工作を經て、子供の推敲態度はだん〳〵と確立し、批正箇所の指示を受けなくとも、自分で讀みかへし自分で批正することが出來る樣になるのであります。

第八十一問　概念的な文を書く子供はどうして指導したらよいのでせうか

先づ概念的な文を生む子供の姿を眺めてみますと、